



東京文化発信プロジェクト

— TERATOTERA

TERATOTERA × 東京アートポイント計画

TERATOTERA FESTIVAL

2011

TERATOTERA祭り
DOCUMENT

10.20-30

ART. MOVIE. DANCE
MUSIC. SYMPOSIUM

POST



東京文化発信プロジェクト

TERATOTERA

TERATOTERA祭り 特別企画

TOKYO- FUKUSHIMA!

2011.10.20-30

井の頭恩賜公園

武蔵野公会堂

吉祥寺バウスシアター

吉祥寺美術館ロビー

大友良英

OTOMO Yoshihide

遠藤 三 三 三 三

ENDO Michiro

和合 亮 一

WAGO Ryoichi

七尾 旅 人

NANAO Tavito

原田 郁 子

HARADA Ikuko

ピカ ☆

PIKA☆

深川バロン倶楽部

Fukagawa Barong Club

中崎 透

NAKAZAKI Tohru

AND MORE

TERATOTERA × 東京アートポイント計画

PROJECT
FUKUSHIMA





10.20^[木] 21^[金] 22^[土] 23^[日] 24^[月] 25^[火] 26^[水] 27^[木] 28^[金] 29^[土] 30^[日]

吉祥寺PARCO^[屋上]・ハモニカ横丁・西友^[入口]・アトレ吉祥寺^[B1ゆらぎの広場]・コビス吉祥寺^[A館3F吉祥空間sora]

Art | 10.20^[木]－10.30^[日] 11:00-20:00 | 入場無料

吉祥寺PARCO^[屋上] | 有賀慎吾・遠藤一郎・利部志穂・SONTON・タムラサトル・永畑智大・東方悠平・松原壮志朗・村田峰紀・和田昌宏

ハモニカ横丁 | 岩井優・志村信裕 西友^[入口] | 浅井裕介 アトレ吉祥寺^[B1ゆらぎの広場] | 遠藤一郎

コビス吉祥寺^[A館3F吉祥空間sora] | 齋藤雄介・遠藤一郎

吉祥寺PARCO^[屋上]

10.20^[木] | 村田峰紀パフォーマンス「ロックドローイング」

10.23^[日] | 松原壮志朗人形劇「信頼」

10.30^[日] | 村田峰紀パフォーマンス「背中で語る」

コビス吉祥寺^[A館3F吉祥空間sora]

10.22^[土] | 齋藤雄介子どもワークショップ「日常アニマルズ」

アトレ吉祥寺^[B1ゆらぎの広場]・井の頭恩賜公園 西園グランド

10.22^[土] | 遠藤一郎風揚げワークショップ「未来龍東京大空風」

街歩きツアー

DJぶりぶり・パウロ中野

10.22^[土] | 「酒とお惣菜」 10.28^[金] | 「コーヒーとパン」

吉祥寺パウスシアター

Movie | 10.22^[土]－11.4^[金] 21:00- | 入場料 1300円 | A・B・Cプログラム上映

A | 東野哲史・山本篤・小沢裕子・鈴木光・Chim↑Pom・鷲山啓輔

B | 柴田祐輔+山本篤・COBRA,千葉正也,+その他・大木裕之・小鷹拓郎・泉太郎

C | 山本高之・高田冬彦・地主麻衣子・松本力・小泉明郎・田中功起

「初日アーティストトーク付き特別プログラム」

10.22^[土] 21:00-22:10 | 入場料 1,300円 | 予約不要

泉太郎 大木裕之 Chim↑Pom 小川希 (TERATOTERAチーフディレクター)

TOKYO-FUKUSHIMA! LIVE!

10.29^[土] 21:00- | 当日券1800円 | 要予約 |

大友良英 遠藤ミチロウ 七尾旅人

東急百貨店 吉祥寺店^[屋上] ※小雨決行・強雨中止

Dance「オープニングパーティ&ダンス」

10.22^[土] 18:00-20:00 (開場17:30) | 1000円(1ドリンク付き) | 予約不要 |

KENTARO!! 森川次朗 × フロム東京

Dance「クロージングダンス」

10.30^[日] 16:00-17:00 (開場15:30) | 入場無料 | 要予約 |

contact Gonzo 小尻健太 熊谷和徳

武蔵野公会堂

Music

10.27^[木] 19:30- (開場19:00) | 入場無料 | 要予約

タテタカコ 前野健太 高田漣

シンポジウムTOKYO-FUKUSHIMA!

10.28^[金] 19:30- (開場19:00) | 入場無料 | 要予約

大友良英 (音楽家) 遠藤ミチロウ (音楽家)

和合亮一 (詩人) 小川希 (TERATOTERAチーフディレクター)

Symposium

10.29^[土] 15:00- (開場14:30) |

入場無料 | 予約不要

芹沢高志 (アートプロジェクト・ディレクター)

三浦展 (マーケティングプランナー)

小川希 (TERATOTERAチーフディレクター)

國時誠 (TERATOTERAディレクター) 他

井の頭恩賜公園 西園グランド・井の頭恩賜公園 ※小雨決行・強雨中止

未来龍東京大空風

井の頭恩賜公園 西園グランド | 10.22^[土] 14:00-17:00

遠藤一郎

オーケストラTOKYO-FUKUSHIMA!

井の頭恩賜公園 井の頭池～西園グランドへ | 10.23^[日] 14:00-15:30 | 入場無料 | 予約不要

大友良英 七尾旅人 原田郁子 ビカ☆ 深川パロン倶楽部 ほかゲストミュージシャン多数

武蔵野市立吉祥寺美術館ロビー^[コビス吉祥寺 A館7階]

プロジェクトFUKUSHIMA! ドキュメント展示^[福島大風呂敷] 10.20^[木]－30^[日] | 10:00-21:00 (26日休) | 入場無料

ディレクター：中崎透 (美術家) アサノコウタ (建築家) プロデューサー：大友良英 (音楽家) 原案：木村真三 (放射線衛生学者)

はじめに

2011年10月20日－10月30日の11日間、東京は武蔵野、吉祥寺駅周辺地域を舞台として「TERATOTERA祭り」が開催されました。若手を中心として、アート、映像、音楽、ダンスといった様々なジャンルから総勢40組以上のアーティストが参加。多彩なパフォーマンスを展開しました。

今回の企画では、“post”というメインテーマを掲げました。“～以降の”、“～の次の”を意味する接頭辞です。言うまでもなく東日本大震災を念頭に置いたテーマであり、誰一人として想像することのなかった今私たちが置かれているこの現状を前にして、表現に一体にながることができるのかを考えようと打ち立てたものでした。

会期がはじまると、百貨店屋上、公園、映画館、商店街といった街の中に多種多様な表現が姿を現しました。笑いを誘う立体、固唾を呑む映像、心躍らせる音楽、酔いしれるダンス。そのどれもが、私たちが生きるあの日“以降の”日常空間の中で凜として立ち上がっているように私には思えました。

人智を超えた現実を前にして、ひとりひとりの人間が生み出す表現に具体的な即効力を求めるのは酷なことかもしれません。しかしそこに、困難や絶望を乗り越え、生き続ける知恵や力を養う手がかりが少しでもあるとするなら、“以降の”世界であっても人間が表現を続ける意味はきっとあるのだと思います。

TERATOTERAは“post”の世界における表現の可能性を示唆できたのかどうかは正直わかりません。ただ願わくば、企画の全貌を追ったこの記録ドキュメントが、私たちが“次に”進むべき方向を少しでも照らしてくれることを願っています。

TERATOTERA チーフディレクター

小川 希

目次	1	はじめに
	3	TERATOTERA 祭り
	4	TERATOTERA 祭り 特別企画 TOKYO-FUKUSHIMA!
	5	ART
	20	オーケストラTOKYO-FUKUSHIMA!
	24	シンポジウム TOKYO-FUKUSHIMA!
	29	福島大風呂敷
	30	DANCE「オープニングパーティ & ダンス」
	31	DANCE「クロージングダンス」
	32	MOVIE
	34	TOKYO-FUKUSHIMA! LIVE!
	35	MUSIC
	36	店長会議
	37	SYMPOSIUM 「TERATOTERA FORUM the second term ～震災－地域－再考～」
	38	インフォメーションセンター・街歩きツアー・ワークショップ
	40	TERATOTERA 祭りまでの歩み
	42	TERAKKOのコメント
	44	広報・ラジオ企画
	45	アンケート集計・感想・意見
	46	作家・出演者紹介
	47	TERATOTERA & TERAKKO STAFF
	48	おわりに

TERATOTERA 祭り

2011 年 10 月 20 日 [木]－30 日 [日] (11 日間) バウスシアターでの上映企画のみ 11 月 4 日まで開催
吉祥寺 PARCO | 吉祥寺 バウスシアター | 武蔵野公会堂 | 他 JR 吉祥寺駅周辺地域

「TERATOTERA 祭り」は、東日本大震災後のアートプロジェクトのあり方を探るべく、「震災復興」「東京をアートで元気に」という二つのスローガンのもと、10 月 20 日－30 日をメイン会期として、JR 吉祥寺駅周辺地域を舞台に開催された大規模展覧会です。映画館や商店街、百貨店の屋上など、日常生活で見慣れた街の風景が、アートの彩色によってこれまで見たことのない表情へと塗り替えられました。会期中は義援金を広く募ることをはじめとして、アート、映像、音楽、ダンスといった多様な表現を展開することで地域に活力を与えると共に、被災地へ向けアートに秘められた力やメッセージを強く発信することを目指しました。

P O S T	2011 年の「TERATOTERA 祭り」のメインテーマは“ ^{ポスト} post”。
	post とは“～以降の”、“～の次の”といった意味を持つ接頭辞。
	その語意通り、“3.11＝東日本大震災”以降のアートや表現のあり方を探るべく打ち立てました。
	あの震災以降、永遠に続くと思っていた私たちの日常は、いつ終わるとも知れない非日常へと突如としてその姿を変えてしまいました。
	「3.11 以降の世界」を生きるアーティストにとっても、それは例外ではありません。
	彼らはこの現実にとどのように対峙しているのでしょうか。
	これまでと真逆の作品を発表する者もいれば、以前と変わらぬ表現を続ける者もいるでしょう。
	見え方はそれぞれ異なるにせよ、あの日以降、全てのアーティストは、制作すること、表現することの意味を、自分自身に終わることなく問いつづけているのです。
	post－それは、アーティストそして我々が生きるこの現実の世界にはかなりません。
	3.11 以降の世界で、アーティストは何を見て、どんなメッセージを発信できるのか。
	そして私たちはそこから何を感じとることができるのか。
	全ては、“その次＝post”へ進むために。
	TERATOTERA チーフディレクター / 小川希
ART	新進気鋭 14 組の現代美術作家の作品、立体、インスタレーション、映像などを展示。
MOVIE	映画館にて 17 組の現代美術作家の映像作品をオムニバス形式で A・B・C プログラムに分け、各日 1 プログラム上映。初日はアーティストトーク付き特別プログラム。
DANCE	「オープニングパーティ & ダンス」 TERATOTERA 祭りのオープニングパーティと若手実力派の 2 組のパフォーマンス公演。 「クロージングダンス」 既存のジャンルに収まらない先鋭的 3 組のパフォーマンス公演。
MUSIC	「TERATOTERA 祭り スペシャルライブ in 武蔵野公会堂」 シンガーソングライターのタテタカコと、全国で精力的にライブ活動を行う前野健太、 さらにスティール・ギターをはじめとするマルチ弦楽器奏者として活躍する高田漣のスペシャルチャリティーライブ。
SYMPOSIUM	「TERATOTERA FORUM the second term ～震災－地域－再考～」 多彩なゲストを招き、震災以降の文化のありかたを地域とつなげて探るフォーラム。
TERATOTERA とは？	TERATOTERA (テラテラ) は、東京都と東京文化発信プロジェクト室 (公益財団法人東京都歴史文化財団) と、吉祥寺に拠点を置いて現在進行形の芸術をフィーチャーしている一般社団法人 TERATOTERA が協働して、平成 21 年度より JR 中央線高円寺駅～吉祥寺駅区間をメインとした東京・杉並及び武蔵野地域を舞台に展開する、地域密着型アートプロジェクトおよびその発信機関の総称です。
東京アートポイント計画とは？	「東京アートポイント計画」は、東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指し、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が展開している事業です。 http://www.bh-project.jp/artpoint
主催 協力	東京都 東京文化発信プロジェクト室 (公益財団法人東京都歴史文化財団) 一般社団法人 TERATOTERA 井の頭公園 100 年実行委員会 財団法人武蔵野文化事業団 吉祥寺活性化協議会 武蔵野市立吉祥寺美術館 株式会社 skylink 株式会社バルコ [吉祥寺店] 株式会社アトレ [吉祥寺店] 株式会社 東急百貨店 [吉祥寺店] 合同会社西友 [吉祥寺店] 小野山興産株式会社 プロジェクト FUKUSHIMA! 実行委員会 DOMMUNE FUKUSHIMA! ARATANIURANO hiromiyoshii 青山目黒 island JAPAN 三菱商事都市開発株式会社 ハモニカキッチン 吉祥寺バウスシアター 無人島プロダクション GALLERY SIDE 2
後援	武蔵野市

TERATOTERA祭り 特別企画 TOKYO-FUKUSHIMA!

2011年10月20日 [木]－30日 [日] (11日間)

井の頭恩賜公園 | 武蔵野公会堂 | 吉祥寺バウスシアター | 吉祥寺美術館ロビー

東日本大震災によって被災した福島県において、現地からありのままに見つめ、さまざまなメッセージを発信するために開始された「プロジェクトFUKUSHIMA!」と連携し、東京から福島を発信するアートプロジェクトとして「TOKYO-FUKUSHIMA!」を実施しました。「プロジェクトFUKUSHIMA!」の中核メンバーである音楽家・大友良英を中心に東京と福島の人的／文化的交流となるプログラムを実施し、有機的なつながりを育むことを目指しました。



オーケストラTOKYO-FUKUSHIMA!

福島から約50名を招き、さらに吉祥寺周辺地域や東京からの一般参加者合わせて総勢200名以上の巨大オーケストラが大友良英の指揮のもと、井の頭恩賜公園で奏でました。

シンポジウムTOKYO-FUKUSHIMA!

「プロジェクトFUKUSHIMA!」代表メンバーが参加し、ありのままの福島と東京から伝えられることなど、様々な課題について生の声を発信しました。朗読によるショートパフォーマンスも実施。

TOKYO-FUKUSHIMA! LIVE!

吉祥寺の老舗映画館バウスシアターにおいて、大友良英をメインアクトとした、福島にゆかりのあるアーティストによる一夜限りの音楽ライブを開催。

ドキュメント展示 [福島大風呂敷]

2011年8月15日に福島で開催された「フェスティバルFUKUSHIMA!」の会場の芝生の上を、膨大な布を縫い合わせた大風呂敷で覆ってしまうプロジェクトが、美術家・中崎透らが中心となり実施されました。広大な会場に文字通り広げられた大風呂敷。なぜ広げたのか…? 吉祥寺美術館ロビーでこの実際に広げた大風呂敷の一部とドキュメント写真・映像を展示しました。

プロジェクトFUKUSHIMA!とは?

2011年結成。音楽家の遠藤ミチロウ、大友良英、詩人の和合亮一が代表となり、様々な企画を展開するプロジェクト。その活動を通して、福島の現状を、そしてこれからの福島の未来を、県内外、国内外とつながりを持ち、考えていきます。

DOMMUNEFUKUSHIMA!とは?

2011年5月8日開局。2011年3月11日に起こった東日本大震災をきっかけに遠藤ミチロウ、大友良英、和合亮一を代表に結成された「プロジェクトFUKUSHIMA!」のコンセプトに賛同した宇川直宏の全面協力の下、福島県内外の有志が集い配信する、世界で初めてDOMMUNE支局。福島県のリアルな現状を、福島県郡山市の特設スタジオから、USTREAM並びに福島県郡山市のコミュニティFM局「KOCOラジ」より毎月1～2本のプログラムを不定期に放送配信中。この先の未来、長期プロジェクトとして継続します。
Twitter | http://twitter.com/DOMMUNE_F
公式サイト | <http://www.dommune.com/fukushima/>

ART

10.20－10.30 | 吉祥寺PARCO [屋上]

吉祥寺の街に新進気鋭のアーティスト14組が集結した。

大型の立体作品がひしめき「アートの遊園地」と化した「吉祥寺PARCO」屋上をはじめ、ショッピングビル「コピス吉祥寺」や駅ビル「吉祥寺アトレ」内の空間、スーパーマーケット「西友」の店頭、そして飲食店がひしめく「ハモニカ横丁」の路地にもアートが進出。街を行き交う人々に、予期しないアートとの出会いをもたらした。街にちりばめられたアートが大胆に、あるいはさりげなく日常の風景を変容させた11日間だった。





SONTON

「吉祥寺ガッパ」

ミクストメディア | 2011年 | 吉祥寺PARCO[屋上]

アーティスト3人のユニット「SONTON」は、工事の足場用に使われる素材で高さ4メートルを超す立体インスタレーションを展示。テーマは「吉祥寺ガッパ」。人形や玩具をちりばめ、カップが水を吐く仕掛けも盛り込み、猥雑でユーモラスな「見世物」を出現させた。



東方悠平

「夏の日の0815」

鉄・モーター・その他 | 2011年 | 吉祥寺PARCO[屋上]

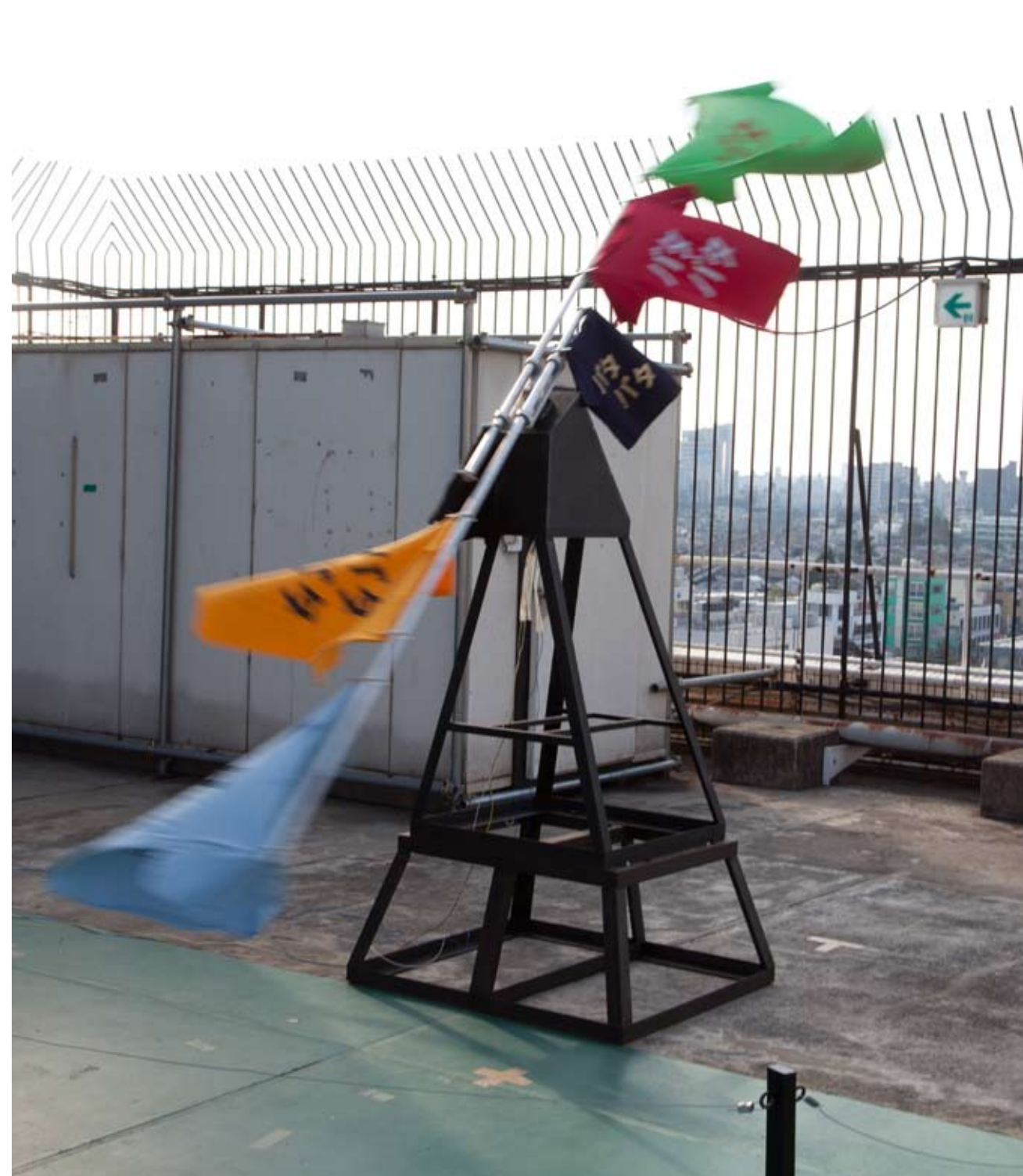
昭和の日本の不思議な文化、屋上遊園地に着想を得て、屋上に不思議なメリーゴーランドを設置。お盆に登場する精霊馬がモチーフで、「3.11」に起きた震災のことも踏まえ、命と生きることと現世のことなど抽象的なものを考えられるような作品を展示した。



永畑智大

「シナプスは音をたてて夢精する」
ミクストメディア | 2011年 | 吉祥寺PARCO[屋上]

永畑智大は、発泡スチロール製の人形のような彫刻を、吉祥寺PARCO 屋上に張ったロープに沿って滑走させる作品を展示した。彫刻は次第に速度を上げていき、最後にはシンバルに音を立ててぶつかる。また、彫刻はどきりとするような存在感を放ちながらも、ユーモアあふれる姿や表情とともに荒削りされた発泡スチロールという素材感が素朴な温かさを感じさせる。その彫刻によるにぎやかなパフォーマンスが観客の目を引きつけていた。



タムラサトル

「バタバタするT シャツ」
Tシャツ・アルミ・モーター・チェーン・鉄・他 | Tシャツデザイン制作:Nobridge | 2011年 | 吉祥寺PARCO[屋上]

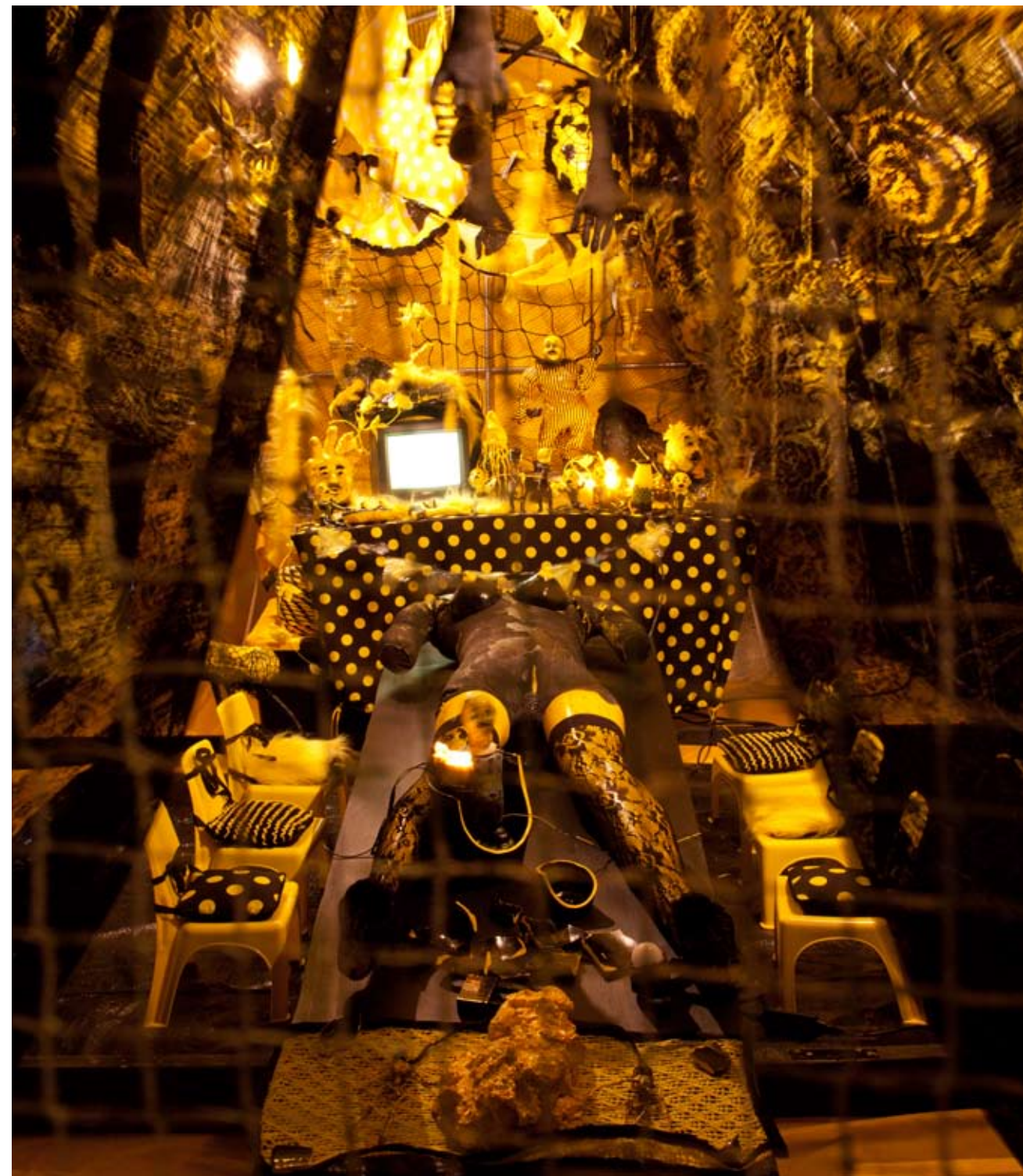
屋上の片隅にひっそりと干されている色鮮やかなTシャツ、よく見ると「バタバタ」という文字が書かれてある。何ごとかと思いきや、機械が動き出して、Tシャツが回転する。字面通りに「バタバタ」し始めたのだ。タムラサトルの作品は、物事の意味を再考させると同時に、思わず笑みがこぼれてしまうユーモアをたたえている。



利部志穂

「黎明」
ミクストメディア | 2011年 | 吉祥寺PARCO[屋上]

テーマは「黎明」。空気を入れると膨らむビニール製の筒状の帯を何重にもグルグル巻きにした、直径5メートル程の巨大なオブジェ。「黎明」という名の通り、オブジェ自体が屋上という場で外気に触れ、完成形を目指しているかのよう日々形が変わっていた。色彩がほとんどないが不思議な存在感がある作品であった。



有賀慎吾

「Fragments of the Yellow Swamp」
ミクストメディア | 2011年 | 吉祥寺PARCO[屋上]

かまぼこ型のテントが会場片隅に出現した。内部には、ひげをはやした奇妙な人形やパフォーマンスの映像を流すテレビモニターなどが雑然と配置されている。黄色と黒という警戒感をいだかせる配色をとまなう有賀慎吾のインスタレーションは、腰をかがめて内部をのぞきこむ鑑賞者を非日常的な体験へといざなった。





和田昌宏

「何も持たずに生まれ、何も持たずに死ぬだろう」

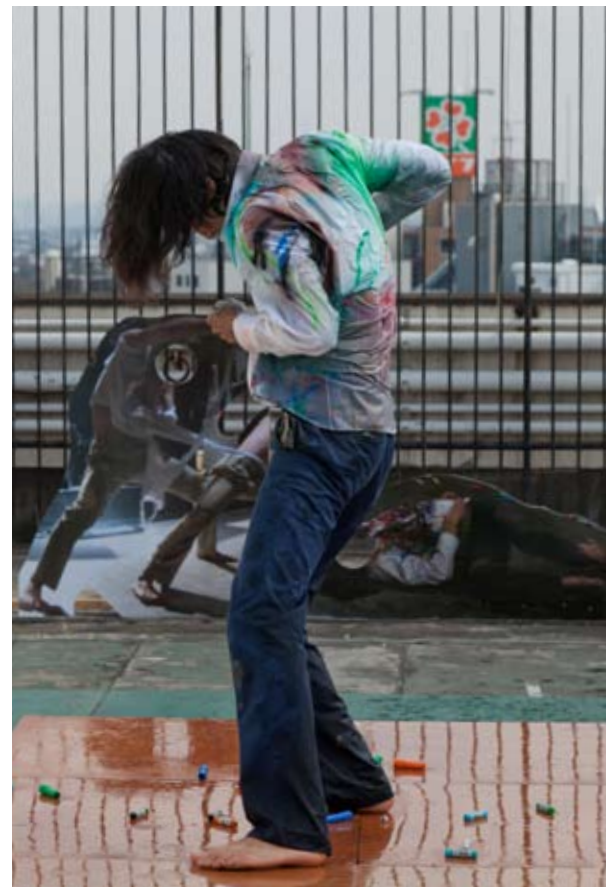
ミクストメディア | 2011年 | 吉祥寺PARCO [屋上]

和田昌宏は八角柱の檻のインスタレーションを制作した。檻の中に存在する疑似自然を支えるのは、マネキンや電飾、鳩の餌が過剰に詰め込まれたショッピングバッグ等により暗示される消費文化だ。檻により分断された鑑賞者と作品の位置関係が支配と従属、自然と文化など様々な二項関係を喚起させる。また、空へと開放される混沌とした疑似自然は吉祥寺の街や自然と繋がり野鳥を招いている。



「孤高のヒーロー」

写真・木材 | 2011年 | 吉祥寺PARCO [屋上]



「背中で語る。」

パフォーマンス | 吉祥寺PARCO [屋上]



「ロックドロ잉」

パフォーマンス | 吉祥寺PARCO [屋上]

村田峰紀

自らの身体を用いてパフォーマンスを行う作家、村田峰紀の等身大パネルが屋上に出現。観客はパネルに顔をはめて写真撮影してみたり、近くから遠くから連なるパネルを眺めてみたり。初日と楽日には、舞台の上で躍動感あふれるヒーローショーを思わせるパフォーマンスを繰り返して、観客を非日常の空間に誘った。

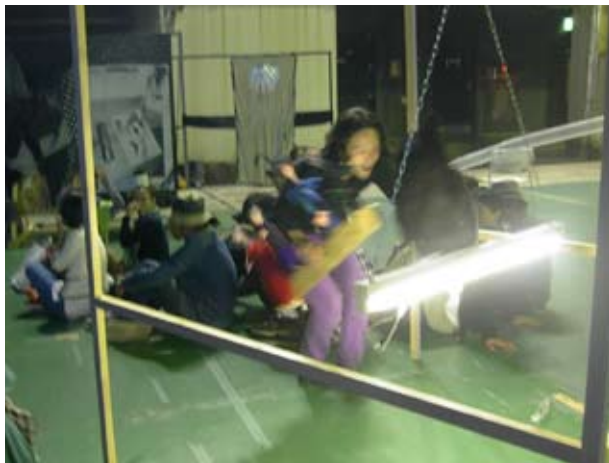


松原壮志朗

人形劇「信頼」

人形劇 | 2011年 | 吉祥寺PARCO[屋上]

松原壮志朗は劇場型のインスタレーションを展示し、そこで10月23日に人形劇を上演した。人形劇「信頼」は、バンドによるライブ演奏とともに上演されるため、表現と演出は毎回異なる。愛と憎悪の相克をめぐる物語は、音楽と響き合うことでさらに感動深く、観客は閉幕後もその余韻に浸っていた。



「未来へ」

布・塗料 | 2011年 | 吉祥寺PARCO[屋上]



「人っていいなあ」

ビニールシート・塗料 | 2011年 | コピス吉祥寺 [A館3F 吉祥空園sora]

遠藤一郎

遠藤一郎は「未来へ」「人っていいなあ」と大書した2枚の幕を展示した。「3.11」後、何度も被災地を行き来しており、その活動の中から絞り出された言葉を大きな幕として表現した。コピス吉祥寺の巨大な懸垂幕は老若男女全ての人が温かい気持ちになる、そんなハッピーな作品。吉祥寺パルコの横断幕は、屋上の廃墟的な雰囲気と相まってモノクロの力強い作品となった。



「遠藤一郎写真展 一東日本大震災 被災地での活動報告」

インクジェット | 2011年 | アトレ吉祥寺 [B1ゆらぎの広場]



齋藤雄介

「so tight, so deep」

エアベッド・ビニール・樹脂・その他 | 2011年 | コピス吉祥寺 [A館3F 吉祥空間sora]

齋藤雄介は、抽象的なペインティングを施したエアベッドをコピス吉祥寺のテラス「吉祥空間 sora」の林に配し、ラップによりそれらを覆うインスタレーションを展示した。公共空間に私的空間としてのベッドを紛れ込ませ、ラップに映し出されたものは憩いなのか、と公私の境から齋藤は問うている。また、木々を束ねるラップは、全体の結束を高める一方で個の自由を抑圧するコミュニティの表裏を静かに告発している。



浅井裕介

「マスキングプラント」

マスキングテープ・ペン | 2011年 | 西友吉祥寺店正面入り口

西友の正面入口に位置する2本の円柱を大きなキャンバスとし、マスキングテープの上にマーカーペンで描く作品「マスキングプラント」を制作、ダイナミックに張り巡らせた植物や生き物のモチーフのマスキングテープにより、普段見慣れた日常生活空間を新たなものと変容させた。



岩井 優

「横丁の旗」

人・雑巾・洗剤・インクジェットプリント・その他 | 2011年 | ハモニカキッチン屋上・ハモニカ横丁

岩井優はボランティアにタオルでハモニカ横丁を掃除してもらうプロジェクトを実施し、その様子を記録した写真を横丁内の壁面に展示した。また、使用したタオルをつなぎ合わせて一枚の大きな旗にし、横丁内の店舗屋上で旗振りパフォーマンスを実施。ハモニカ横丁への敬意とともに、被災地、そして「3.11」後の日本へエールを送った。



「赤い靴」

映像インスタレーション | 2009年 | ハモニカ横丁



「Crown」

映像インスタレーション | 機材協力: ペンキュージャパン株式会社 | 2011年 | ハモニカキッチン3F

志村信裕

志村信裕は、日没後のハモニカ横丁で映像インスタレーション2作品を展示した。ハモニカ横丁の建物上部には、長年の店の入れ替わりの中で取り残された波板があり、そこに「赤い靴」を投影した。落下しては引き上げられる靴の映像は、通りに並ぶ赤提灯とよくなじみ、横丁を訪れる人々をそっと迎え入れた。もう一つの作品「Crown」は、飲食店「ハモニカキッチン」3階から闇市の面影を残す屋根に投影。瓶ビールの王冠が降っては散らばる映像は、お酒を飲みにも偶然足を運んだ人たちをも楽しませた。

オーケストラTOKYO-FUKUSHIMA!

10. 23 | 井の頭恩賜公園[井の頭池 ～ 西園グランド]

オーケストラTOKYO-FUKUSHIMA! は、アーティストの指揮のもと総勢 200 名が巨大オーケストラを奏でるというイベントである。参加アーティストは大友良英、原田郁子、七尾旅人、ピカ☆、ちんどんおてんきや、チャンチキトルネード、深川バロン倶楽部。

そこに福島在住の演奏者や公募に応じた東京在住の一般参加者らが加わった。

10月23日、晴天に恵まれた日曜日の午後、井の頭恩賜公園に観客を含めると3000 人もの人が集結。

この日、この場所でしか生み出すことのできない音楽が奏でられ、東京と福島の人々がつながった1日となった。

オーケストラTOKYO-FUKUSHIMA! の始まりは、大友良英を中心に 8 月 15 日に福島市で行われたイベント「フェスティバルFUKUSHIMA!」である。その中で、様々な楽器を持って集まった人々が、アーティストの指揮のもと即興でオーケストラを奏でるパフォーマンスが行われた。そして今回、東京と福島の人々が一緒になりオーケストラを奏でよう、という思いで行われた。

福島からの参加者約 30 人は、未来美術家の遠藤一郎のバス「未来へ号」に乗ってイベント前日に吉祥寺に到着した。オーケストラの当日は、午前中のリハーサルから大いに盛り上がりを見せていた。大友の合図によって、音を伸ばす長さが決められる。それ以外は、自由に思い思いの音を奏でるのみである。本番前のお昼休憩の時間も、井の頭恩賜公園のグランドには音楽が鳴り響いていた。

いよいよ 14 時を過ぎ、オーケストラはグランドを出て公園全域をパレードし始める。そしてたまたま公園にいた人たちの興味を惹きながら、またグランドへと集結し、最後に巨大オーケストラを奏でる。それはとても圧倒される光景であった。この日初めて集まった人々がひとつの音楽を奏でるという奇跡のような状況が広がっていた。アーティストの力と人々の力で、そこにはとても強いエネルギーが集まっていた。きっと、集まった人々は誰もが何らかのメッセージを受け取り、また自身の中になんらかの思いを抱いただろう。





シンポジウム TOKYO-FUKUSHIMA!

10. 28 | 武蔵野公会堂 [ホール]

「TOKYO-FUKUSHIMA!」は、東日本大震災と原発事故に見舞われた福島で立ち上がった

「プロジェクトFUKUSHIMA!」と連携した特別企画。10月28日に行われたシンポジウムでは、先進国における大規模な放射能汚染という未曾有の事態のさなかでメッセージを発信し続ける「プロジェクトFUKUSHIMA!」から、中心メンバーである音楽家の遠藤ミチロウ、大友良英と詩人の和合亮一を招いて「3.11」以後を語り合った。

司会は小川希TERATOTERA チーフディレクターが務めた。

小川 「TERATOTERA 祭り」の特別企画として、「プロジェクトFUKUSHIMA!」と連携して、東京から福島を発信するアートプロジェクト「TOKYO-FUKUSHIMA!」を開催することとなりました。今日は「プロジェクトFUKUSHIMA!」の代表を務めている方々を招いてシンポジウムを進めていきたいと思います。まず、「プロジェクトFUKUSHIMA!」について説明をいただきたいと思います。**大友** 大きくは三つの骨格で動いています。一つは野外フェス「フェスティバルFUKUSHIMA!」。それから「スクールFUKUSHIMA!」。一般から参加者を募って、プロジェクトに参加する音楽家、詩人、アーティスト、研究者らと、ともに学び、ともに作品を制作するというものです。もう一つは「DIY FUKUSHIMA!」という、プロジェクト参加者の作品を配信していくサイトがあります。これは、「DOMMUNE FUKUSHIMA!」という、郡山のコミュニティFMからUSTREAM とFMラジオで放送する活動とともに、福島の実現な現状を発信しています。文化の面から何ができるかと、震災後に動き出したものです。

小川 最初に、遠藤さんから大友さんにもちかけたそうですが、

遠藤 震災以降、福島の音楽関係者と話した時に「ミュージシャンは誰も福島に来てくれなくなっちゃった」というの

で、「じゃあ行くよ」って答えたことから始まって、僕はライブツアーで東北をよく回っているんです。でも、ただツアーで行くだけじゃなくて、福島から何か発信することがやれないかなと思って、大友さんに相談してみたんです。

小川 皆さん福島の出身ですね。

大友 僕は横浜生まれで、9歳から18歳までが福島なので、ちょっとよそ者感があるんですけど。

小川 和合さんは福島で教鞭をとられています、大友さんから連絡があったとき、どういう思いでしたか。

和合 それ以前にも大友さんからツイッターにメッセージが来ていましたが、急に「会いたい」という連絡をいただきました。大友さんはすごく怖い方という印象があったんです。遠藤さんはその二乗くらい怖いと思っていました。僕が高校時代に「鶏や豚の頭を投げて歌う先輩がいる」と聞いていたので、初めての打ち合わせではとても緊張しました(笑)。お二人とも僕の高校の先輩にあたります。

小川 大友さんは和合さんをツイッターで知ったそうですが、

大友 「詩の礫」が始まった直後でした。福島の情報を探していたときに見つけて、福島の様子を知るために切実なものとして読んでいた。4月に初めて会ったのですが、会っているうちに「何かいっしょにできるかも」となっ

ていったんです。

小川 遠藤さんと和合さんの出会いは。

遠藤 僕は太友さんのツイッターで和合さんのことを知りました。震災以降のリアルな福島の感じを和合さんのツイッターの詩を通して感じた。僕と太友さんは東京にいて、福島のことで何かやるんだったら、福島にいる和合さんと、ということになったんです。

小川 太友さんと和合さんが会って、8月15日の「フェスティバルFUKUSHIMA!」の話が進んでいったのですか。

大友 そんなすぐには進まなかったですよ。福島駅で待ち合わせて、2人で「はりまや」という飲み屋に行って「フェスはどうかろう」って話していたんです。

和合 その時は、正直戸惑いました。福島では野外フェスはあまりなかったんです。避難者もいっぱいいるこの時期にできるのだろうか。そしたら、「はりまや」のマスターが奥から出てきて「福島、今元気ないから。フェスティバルやってくださいよ」って言うてくださった。その一言を聞いた時に「じゃあ、やるかっ!」と。

大友 「このまんまじゃ店が潰れるから」みたいな勢いがあった。本当は、そのマスターがここにいるべきなんです(笑)。

小川 「プロジェクトFUKUSHIMA!」という名前はどこからですか。

大友 和合さんがテーマは「福島」じゃないかと言ったんです。ちょうど飯館村の避難勧告が出たりした時期で、どうなるかわからないっていう危機感があった。「福島」を残さなきゃいけないという気持ちもあった。それですぐに(遠藤)ミチロウさんにメールを書いた。

遠藤 僕は最初に「原発なんてクソくらえ」っていうタイトルでやろうと思っていた。原発が軸にあって、いろんな事が起こっちゃって、福島に住んでる人たちの気持ちっていうものすごく複雑だった。避難しなきゃいけないのに避難できない人もいれば、避難したくないのに避難しなきゃいけない人もいるし、子供からおじいさん、おばあさんまでみんないろんな思いがグチャグチャあって、そこに政治的なものも絡んできてるし、もう全部ひっくるめて、なんでこんなことになっちゃったんだよ、みたいなことで「原発なんてクソくらえ」っていうイメージだったんです。でも、福島のいろんな思いとか事情っていうのも包括したイメージのタイトルって、「福島」が一番いいなって思っただんです。

大友 4月の段階で、東京でUSTREAM「DOMMUNE」をやっている宇川直宏さんに連絡をしたんです。宇川さんも震災の時に、被災地から何かやらなきゃいけないと思っていたので、とにかく発信する回路を作ろうと。郡山で音楽関係の仕事をしていた森彰一郎さんやKOCO ラジというコミュニティFMを結びつけて、「DOMMUNE FUKUSHIMA!」を立ち上げてもらった。で、5月8日の最初の放送をきっかけに、「フェスティバルFUKUSHIMA!」をやるという大風呂敷をを広げたんです。「福島はネガティブな名前として世界に広まったけれど、ポジティブに変えていこう」と。和合さんと会って1カ月もたっていない頃です。

小川 あれだけの大規模なフェスは普通、1年以上かけて準備するのでは。

遠藤 僕もすぐできると思いつつ、実際にどんな事をやらなきゃいけないのかっていう想像は全然できてなかった。

大友 ミチロウさんの存在が大きいですよ。ミチロウさんたちのバンド「スターリン」に影響を受けた人がいっぱいいる。ミチロウさんが言うてくれたことでみんなが動いたんです。

遠藤 やっぱ因果応報ですよ。宇川さんも「僕は高校生の時に、四国の高松で、スターリンのライブのスタッフをやった」ってぼろっと漏らしたんです。「豚の頭を買いに行ったんですよ」って(爆笑)。

和合 福島には震災と原発事故で大きな破壊がもたらされた。その破壊の中から何を続けるかという視点、その眼差しを、僕はお二人からいただいたと感じていますね。

小川 福島の再生が始まっていると思うんですけど、大友さんは音楽で状況に対して何かアクションが出来るという確信はあったんですか。

大友 全然思っていなかったです、最初の段階では。音楽だけじゃなくて文化的な営みがどれだけ必要かを、僕は和合さんのツイッターの詩を見て思っただんです。たかだか百数十文字ですが、サバイバルするとはこういうことだという、人の心を動かすものが出てきた。それを受けて何か根源的なものを感じたんです。人間は言葉を発しなければ生きられないという切実なものがツイッターの中にあった。同時に、福島ではみんな辛そうにしている、とんでもない事態が起こっていると思った。その中で何かやっていくには、文学も科学も含めて全体で動いていかないとどうにもならない。そのことを4月末に発言したら、ネットなどで読んでくれた人がいっぱいいて、フェスティバルにも集まってくれた。やっぱり言葉は力があり、それで人は動いてくれる。

小川 僕は和合さんのツイッターをリアルタイムで追っていたんですけど、つぶやきとは全然違う次元に入った瞬間を感じた時がありました。

和合 震災後はずっと閉じこもって、怒りに身をまかせて、悲しみに心をまかせて書き殴っていたような状況だったんです。20年ぐらいつつと読者を意識して詩を書いていたのですが、震災後はなにもかも全部壊れて、自分の中そのものが瓦礫の中にあるような気持ちになった時に、書き続けることで「明けない夜はない」という言葉が出てきたんです。震災前はほとんどツイッターをしなかったんですが、今はツイッターから発想が始まっているようなところがある。なぜかという、言葉を返してくれるキャッチボールがあるから。そういう中で心と言葉のやりとりをすることが自分の中でとても大きい。言葉というのは心とつながって初めてリアリティを持つのであって、心が言葉と離れていけばどんなに飾ってもそれはつながらないんだと感じたんです。みなさんのエネルギーをもらって自分の中で目覚めてきたんです。もっと書いていこうと思ったのがちょうど自分の中でも変わってきた時だったのですね。

小川 「フェスティバルFUKUSHIMA!」もツイッターで情





大友良英

報が広がっていつて、そうそうたるミュージシャンが集まっていたんですが、声がけはどのように進めていったのですか？

遠藤 自分の知り合いで、福島に絡みのあるようなミュージシャンに声をかけていったのですが、ほとんどがインディーズという自分たちのやり方でレコードを出して演奏活動もしているミュージシャンたちだった。「プロジェクト FUKUSHIMA!」をやっていくうえでの僕たちの基本的な姿勢と、出演してくれたミュージシャンたちの活動の基本姿勢が重なりあって、自由な意思で自分たちの表現を出していくことができたのかなと思ったんです。

大友 今回は声をかけるまでもなく、向こうから来てくれた。断った人の方が多いくらいです。スタッフもたくさん来てくれて、すごく嬉しかった。野外フェスの会場に巨大な風呂敷を敷いたんですが、あの風呂敷を作って敷くのにも地元の人たちとともに、美術界のそうそうたる人たちが参加してくれたんです。

和合 あの風呂敷が宙に舞ったときに、このフェスティバルは今まで僕が感じてきたフェスティバルとは違うものだったと思ったんです。アートの力が復権するような瞬間だった。クリエイティビティが政治や文化のメッセージよりも先にたったイベントというか、クリエイティブという眼差しが随所にある。大友さん、ミチロウさん、スタッフのみなさんのお力だと思うのですけれど、福島でものを創っていくことをここで宣言できるんだ、と僕は福島の人間として思ったんです。福島の皆さんは「3月11日」からずっと悲しいんです。これからもずっと悲しいと思う。でも「悲しい」という言葉、それ以上の、悲しいってことを訴える表現が、僕らにはないんですよ。それを創っていくのがアートだと思うんです。「悲しい」という言葉を繰り返されると、「またか」と思ってしまうところがある。「悲しい」ってことにいろんなグラデーションをつけていくのがアートの力だし、これから福島でやっていくことなんじゃないかと考えています。

小川 会場ではカラフルな大風呂敷が敷き詰められていて、

その上でミチロウさんや大友さんが音楽をかき鳴らしていた。すごい光景でした。大友さんはどんないきさつで「大風呂敷」を広げるようになったのですか。

大友 0.5マイクロシーベルトと会場がセシウムで汚染されているわけで、このことを抜きにして前に進めない、そう思いました。放射線衛生学の木村真三先生が「風呂敷で会場を覆えば、セシウムが直接肌に触れないし、外に持ち運ぶことにもならないしずいぶん違うはずですよ。そうすることで福島でフェスをやる意味を考えていきましょう」って言うてくれたんです。

和合 大風呂敷のきっかけは、私の記憶では、打ち合わせをしていた時に大友さんが「俺さ、すぐ風呂敷広げちゃうんだよねー」って言ったんですよ。それで周りのスタッフが「そうね、大友さんすぐ風呂敷広げちゃうんだよねー」「あ、広げちゃう？」っていう会話があった。あそこから始まったような気がする。

遠藤 会場で、自分が提供した風呂敷がどこにあるんだろうって探すと、宝探しみたいだった。見つけた時の喜びはすごかったですよ、記念写真撮ったりとかしてね。

大友 シンプルなアイデアだけど、いろいろ楽しみ方があったんです。手伝いたいという人が全国から風呂敷を送ってくれたり、刺繍をしてくれたりして、結構感動的でしたよ。

小川 普通のフェスと違ったということは、大風呂敷のエピソードからも伝わってくるんです。実際にやってみて感じられたことはありますか。

遠藤 やっぱり出会いだなと思いました。人と人が出会う喜びが、その次に展開していく力になっていくんだなって感じた。風呂敷を敷いた時に、ばーっと雨が降ってきて、みんなテントに避難したんです。それまでは誰が聴くでもないままに歌っていたのが、テントに集まったらみんな熱心に聴くようになった。濃密なコミュニケーションが生まれたんですよ。雨が上がって、みんな会場に散らばって演奏をやりだしたら、雰囲気ガラッと変わった。そこに来



左 | 遠藤ミチロウ 右 | 和合亮一

ている人たちがものすごく生き生きしてるんですよ。期待感とか楽しみ方とかが、雨の水が蒸発して水蒸気みたいにもわっと湧き上がってくるみたいな感じで、想像もしなかった感じのコンサートになった。「雨だけは降らないでほしい」と思ってたのが、雨が逆にそのフェスの本質を見せてくれる結果になった。やばいことが実はものすごく良いことになるきっかけになるという、見本みたいな感じですよ。

大友 ちょうどセシウムから「雨宿り」しているような感じもあった。セシウムは雨みたいに甘いもんじゃないけど、でもこんな状況がなかったらこんな出会いもない。起こってしまったことは取り返しがつかないけど、だったら、もっと積極的にこの状況をどう跳ね返していけるかを考えた方がいい。

小川 和合さんはフェスティバルに参加されて、ご自身の中で変わったことはありますか。

和合 福島の方々が「応援しています」と声をかけてくださるんですが、僕は詩を書いてきてこんなふうになんか励まされたのは初めてなんです。「プロジェクト FUKUSHIMA!」のことも「こういうものがなかったら、私たちは何のメッセージも出せないし、気持ちのはけ口もない。だから応援しています」って言うてくださる。今の日本で、声をあげることの難しさと向き合ったフェスティバルを、福島の人たちは受け止めてくださっているんです。同じ場において、同じ呼吸をして、同じことを感じて、それぞれの場に戻っていく。フェスティバルが本当の意味で福島と向き合ったという印象を受けました。

大友 5月の頃は汚染の状況をどう解釈していいかわからなかったんで、木村先生に出会ったことがすごく大きい。放射線や放射能の被害に詳しい福島の記者や、郡山でいろんな化学物質の環境における影響とかを調査してる人とか、みんな入ってきてくれた。そこに美術家が参入してきて、近所のおばちゃんも参入して、風呂敷を敷いて……。そういう動きを見ていると、僕は音楽家として人と人をつな

げていけるポジションにいるので、自分自身がメディアになってつなげていく展開を考えていけばいいのではと思います。

小川 つい先日でもチェルノブイリに行かれましたね。

大友 正直にいうと、僕が1回行ったところで何も変わらない。でも、何度か行く中で、つなげていけることはあると思います。25年たってもやっぱり大変だというチェルノブイリの経験は必要だと思うんですよ。チェルノブイリであれ、福島であれ、放射能との戦争状態は今も続いている。こんな社会を作っちゃった、こんな社会になってしまったことに対して、どう思っているのか。それは自分の責任も含めていつも考えてます。

小川 「プロジェクト FUKUSHIMA!」の今後の展開は？

遠藤 今回、同時多発という形で、日本でも何十カ所と同じ8月15日にフェスティバルをやってくれたんです。その後でツアーに行ってその人たちに会々と、それぞれの土地で、みんな思いが違う。福島のことに対するリアリティーはあんまりないけど、彼らのリアリティーで何かをやろうという形になっている。これからも福島とつながってやっていこう、という動きが広がってきた気がする。

小川 和合さんは、今後のご自身の活動の方向性についてはいかがですか。

和合 日常がどんどん静かになっている。今までは「終わりのない非日常」が、日常に戻されていくことが日本の「文化」でした。ヒロシマの問題とか沖縄の問題をきちっと受け止めて来なかった。そして今、福島の問題をどう受け止めていいかわからない。半年が過ぎて、その問題にもう蓋がされようとしている。この日本の冷たさと、貧しさ、この「文化」の現状に対して、デザインしていく力が必要だと思うんです。福島にいて、この蓋をされたままになっていく現状を、どうやって後世に残して、そして私たちの暮らしを私たちとして掴んでいくか、この震災をどうデザインして、そしてたくさんの人と分かち合うか、これがものすごく大きな



小川 希

命題だと思うんです。そういうことをクリエイターが集まって考えていく場になっていくことが「プロジェクト FUKUSHIMA!」の活動なのかなと僕は思っているんです。それを僕自身は言葉で創っていきたい。

大友 チェルノブイリでは25年経っても被害を受け続けているように、すごく長い活動になる。放射能は見えないので、心と知識で戦っていくしかない。そのためには心と知識の体力つけていく必要があるだろう、という意味で「スクール FUKUSHIMA!」をやってるんです。僕が音楽を教えたり、木村先生の学校とかやったりとか、スクールを長くやっていく活動の柱にしたい。あとは、やはり内と外をつなげていくことで、「プロジェクト FUKUSHIMA!」を賑やかにしていく必要がある。閉じた中で他と理解し合えない価値観だけが盛り上がっていったってしょうがないと思うんです。

遠藤 今回のフェスティバルをやる中で、色んなことが出来るのが手探りでわかってきた。本当はどういう社会が、生活する場がいいのかという、理想的なことを僕らは考えてはなかった。実は今、一番絶望的な場所になってしまった福島だからこそ、もっとリアルに考えられるんじゃないかという気はする。

小川 最後に皆さんからメッセージを。

和合 高村光太郎という詩人に「天然の素中」という言葉があるんです。山とか川とか風とかの中、いわば空気の中です。その「天然の素中」を高村光太郎は探し続けた。今、福島も東京も、空気の中に何かがあるんじゃないかという恐怖感があって、特に若いお母さんがものすごく心配している。僕は「天然の素中」を取り戻したい、自分が生きている間に皆で取り戻したい。一緒にその空気の清々しさを取り戻しましょう。

大友 この3人の個性ってすごく面白いんです。和合さんは福島にずっと住み続けている学校の先生。ミチロウさんは、草の根のように日本中にネットワークを張り巡らせて

いる。同時多発フェスはミチロウさんのネットワークなんですよ。僕は日本の外なんかで仕事をやりながら、独自のネットワークを持ってる。この3人が皆それぞれのやり方で動いている、その感じがいい。そもそもミチロウさんと和合さんが一緒にやってる図なんて相当変なんです。だけど、これから皆さんが描いていく未来像ってこんな感じかなと思うんです。

遠藤 今回の福島のこと、この現実を何とかして変えていくという、一番の切実なリアルな叫びとか想いとか動きとか声を感じる。やっぱり女の人、特に子供を持ったお母さんの声が一番切実だし、リアル。それがこれからを変えていく一番の力になるっていう気がする。僕はその声を一番大事にしてやっていきたいなって思っています。

小川 今日は貴重なお話を聞かせていただいて本当にありがとうございました。

遠藤ミチロウ

音楽家。1950年福島県二本松市生まれ。82年「スターリン」でメジャーデビュー。伝説的なパンクバンドとなる。85年の解散後はソロアーティストとして活動を続ける。

大友良英

ギタリスト、作曲家、プロデューサー。1959年横浜市生まれ。10代を福島で過ごす。様々な人たちとのコラボレーションを軸に展開する音楽作品やコンサートに力を入れる。

和合亮一

詩人、国語教師。1968年福島市生まれ。98年、第1詩集『AFTER』で第4回中原中也賞を受賞。震災後はツイッターで連作「詩の礫」を発表、大きな反響を呼んでいる。

司会：小川 希

TERATOTERA チーフディレクター。1976年東京生まれ。Art Center Ongoing 代表。

「詩の礫」

10月28日の「シンポジウム TOKYO-FUKUSHIMA!」にて、トークの前に和合亮一、大友良英、遠藤ミチロウによる20分間のパフォーマンス「詩の礫」を行った。これは和合の詩の朗読と大友のギターと遠藤のボイスによる即興演奏が同時進行するという内容である。ダイナミクスのコントロールにより非常に緊張感のあるパフォーマンスとなった。



福島大風呂敷

10. 20 — 10. 30 | 武蔵野市立吉祥寺美術館 [ロビー]

ディレクター：中崎 透 (美術家)・アサノコウタ (建築家) | プロデューサー：大友良英 (音楽家) | 原案：木村真三 (放射線衛生学者)

8月15日に福島市郊外「四季の里」で行われた音楽イベント「フェスティバル FUKUSHIMA!」で会場を美しく彩っていた大風呂敷。来場者に対し放射線の影響を軽減するため広大な芝生の上に敷かれていたが、東京では大風呂敷の一部がきれいに折り畳

まれ、アクリルケースに収納して展示された。

風呂敷、ハンカチ、シーツ、手ぬぐいなどの生地が縫い合わされ、多くの人々の気持ちがたくさん詰まった美術作品といえるだろう。隣のスクリーンではドキュメント映像が上映され、来場者にフェスティバル会場の雰囲気を伝えていた。



DANCE

「吉祥寺の風景の中でダンスを」というねらいのもと、オープニングパーティと最終日に東急百貨店吉祥寺店屋上でダンスイベントを開催した。遊戯施設やペットショップがあり、いつもは子供たちの遊び場や大人の休憩場所となっている屋上広場の空間が、当日は野外ステージに姿を変え、ダンスが場を彩った。

「オープニングパーティ & ダンス」

10.22 | 東急百貨店吉祥寺店〔屋上〕

10月22日夜、「TERATOTERA祭り」のオープニングパーティとともにダンスが開催された。出演者はKENTARO!!、森川次朗 × フロム東京の2組。200人を超す観客が来場し、パーティのドリンクやフードも並んで賑やかなひとときとなった。開幕を飾ったのは森川次朗 × フロム東京の「寺ガール」。震災後の街への思いを込めたステップに、震災がそれぞれの

心を揺るがしたことが思い出された。続いてKENTARO!!「テラトテラとダンス」。ステージを飛び出して遊具で遊ぶ子供たちとともに即興で踊るなど、会場をフルに使い、ダンスが目の前の風景を変えた。「オーケストラ FUKUSHIMA!」のサブライズ演奏もあり、会場は一体感に包まれた。



KENTARO!!



森川次朗 × フロム東京

「クロージングダンス」

10.30 | 東急百貨店吉祥寺店〔屋上〕

10月30日夕刻、「TERATOTERA祭り」の閉幕を飾るダンスイベントを開催した。熊谷和徳、小尻健太、そしてcontact Gonzoが出演。開演前から熱心なファンが多数訪れた。日曜日の穏やかな暮れ方だったが、ダンスが始まると緊張感に包まれ、屋上広場は屋外劇場へと一変した。熊谷和徳の軽快なタップ、小尻健太の全身から表現が溢れてくるようなダンス、そして、contact Gonzoの寡黙でありながらも力強いパフォーマンス……。息をも飲むような彼らの踊りに魅了された贅沢な時間だった。



contact Gonzo



熊谷和徳



小尻健太

MOVIE

10. 22 — 11. 4 | 吉祥寺バウスシアター

10月22日から11月4日まで、老舗映画館「吉祥寺バウスシアター」で

「TERATOTERA 祭り MOVIE」がレイトショーで上映された。17組の現代美術作家の

映像作品をオムニバス形式でA・B・C プログラムに分け、各日1 プログラム上映するという試みだ。

初日はトークショー付きの特別プログラムが上映された。トークショーの出演者は泉太郎、大木裕之、

Chim↑Pom の3組。 TERATOTERA チーフディレクター小川希が司会を務め、

最初に10分ほどトークをしてから、出演3組による作品を上映、その後再びトークを続けた。

トークは、「TERATOTERA 祭り」全体のテーマに沿って各作家の「3.11」の際の状況から始まり、それ以後の創作や生活がどう変化したか（またはしなかったか）という話題に展開していった。

各作家の「3.11」体験は、実はそのまま各作品に反映されている。泉太郎「ヒルの営み・バイキング」や大木裕之「メイド オン ザ バルコニー」バウス mix は震災をストレートに扱ったものではないが、震災を経験したことによって鑑賞者に

は、作品を見る角度の一つとして「震災」というフィルターが存在してしまうということに自覚的な内容であった。一方、Chim↑Pom「LEVEL 7 feat. 明日の神話」は震災を正面からテーマにしたものだ。震災直後、渋谷で発表した絵画作品を通して投げかけた具体的なメッセージを改めて1本の映像作品として提示した。あえてメッセージを伝える、という強い意志が感じられる作品であった。



大木裕之



Chim↑Pom

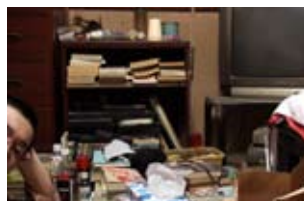


泉 太郎

プログラム A [約54分]



東野哲史
「3BG8」2011



鈴木 光
「Mr. S」2011



山本 篤
「To be a hero」2011



Chim↑Pom
「LEVEL7 feat. 明日の神話」2011



小沢裕子
「重ねる」2011



鷺山啓輔
「続・荒波にみる / Facing the stormy seas」2011

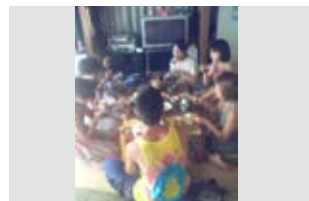
プログラム B [約55分]



柴田祐輔 + 山本 篤
「繋がらない」2010



COBRA, 千葉正也, + その他
「COBRA は狩人を演じた -Playing of the hunter-」2011



大木裕之
「メイド オン ザ バルコニー」バウス mix 2006 - 2011



小鷹拓郎
「Looking for a utopia」2011



泉 太郎
「ヒルの営み・バイキング」2011

プログラム C [約60分]



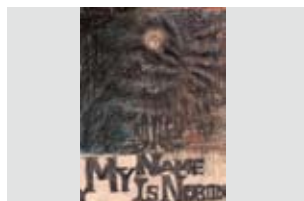
山本高之
「どうぶつたちの一週間」2010



高田冬彦
「Born This Way 1.0」2011



地主麻衣子
「窓を吸え!」2011



松本 力
「My Name Is Nobody」2011



小泉明郎
「Art of Awakening」2005



田中功起
「Beer & Hose」2008 - 2011

TOKYO-FUKUSHIMA! LIVE!

10. 29 | 吉祥寺バウスシアター

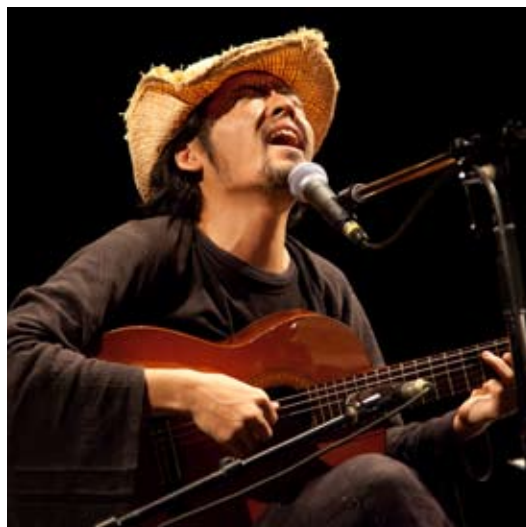
10月29日夜、映画館「吉祥寺バウスシアター」にて、「TOKYO-FUKUSHIMA! LIVE!」が開催された。東日本大震災で被災した福島県の現実を見つめ、現地のメッセージを発信する「プロジェクトFUKUSHIMA!」と連携したプログラム。同プロジェクトの中核メンバーである遠藤ミチロウと大友良英、被災地を訪れ音楽活動を行っている七尾旅人の3人による一夜限りの音楽ライブが行われた。

大友良英はギターとドラムによる即興の演奏。美しく穏やかな音色とどこか不穏なノイズが絡み合うさまは、平穏な日常に戻ったかにみえる東京と、いまだ先行きの見えない日本の未来とを思わせるものがあった。

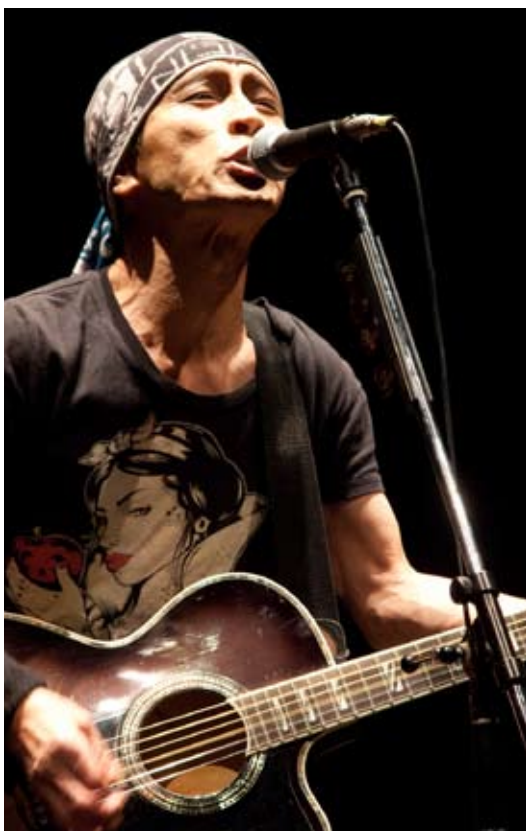
七尾旅人は、被災地を訪れるなかで生まれた新曲を、アコースティックギターやギタレレの演奏とともに歌い上げた。福島 of 農家の方との交流など、エピソードをまじえながら披露される優しいメロディーは、じわりと心に染み入った。

遠藤ミチロウは故郷福島に暮らす母親への想いや、原発問題への憤りを表現した楽曲などを披露。ギター1本にのせた、言葉にならない想いまでも感じられる力一杯の歌声が会場を満たした。

ミュージシャンとして現在の東京・福島に向き合う彼らの三者三様の想いが響き合った濃密な空間の余韻を残し、約1時間半の公演が幕を閉じた。



七尾旅人



遠藤ミチロウ



大友良英

MUSIC

10. 27 | 武蔵野公会堂 [ホール]

シンガーソングライターのタテタカコと、全国で精力的にライブ活動を行う前野健太、さらにスティール・ギターをはじめとするマルチ弦楽器奏者として活躍する高田漣の3人による、東日本大震災の義援金を募るスペシャルチャリティーライブが10月27日、武蔵野公会堂で開かれた。

アートで東京を元気に! そんなスローガンの下、「TERATOTERA祭り」は様々なアートシーンを届けるために企画された。準備段階では、考え得る限りのアイデアを出し合い、アーティストの要望に応えようと努力を続けた。そうして実現したイベントの一つが10月27日に行われたこのライブだった。一番手は高田漣。その歌声は都会の天気雨のよう。青空のもと、突然降りだす雨は心に優しい湿度を残す。吉祥寺の別の顔を、音楽の力で見せてくれた。二番手の前野健太。ほんわかした愛すべき人物を予想させるその風貌とはうらはらに、彼の音楽は時に過激に聴衆を攻め、そしてその言葉以上に彼の中に在るやりきれなさや哀しみを突きつける。持て余すくらい熱い魂のライブであった。そして最後にタテタカコ。音楽に高みというものがあるとしたら、それは彼女の世界観だろう。発せられるメッセージは甘い葉のように、癒えない傷痕に静かに降り注ぐ。明るい曲なのに涙をさそい、悲しい歌なのに元気になっていく。自分自身との対話は掌の中の水晶のように大切にしないで、そう、彼女が伝えてくれた気がした。

「TERATOTERA祭り」後半にかかるタイミングで行われた音楽ライブ。アーティストたちが発信する三者三様のメッセージに、目が覚めた一夜だった。



タテタカコ



高田 漣



前野健太

店長会議

10.21 | 武蔵野商工会館 [会議室]

10月21日夜、武蔵野商工会館会議室で「店長会議」が開催された。

参加者はArt Center Ongoing、STORE、百年、シルバーエレファント、PARADA、Roundabout、バウスシアター、おふくろ屋台、108号室、momocurry の各店長。

10月29日のシンポジウム「TERATOTERA FORUM the second term ～震災－地域－再考～」に先立ち、吉祥寺地域の文化を支える方たちが集まり、ボランティアスタッフや地域の人などの観客とともに、まちとの関係を再考する会議となった。

テラッコ(ボランティアスタッフ)が吉祥寺のお店の方々とお話する中で、他のお店や地域とのつながりがあまりないという声が聞かれた。顔の見える関係をつくることが、地域と人とのつながりをつくる第一歩となるのではないか。こうした想いから「店長会議」は生まれた。会議では、吉祥寺でそれぞれに魅力的な活動をされている参加者の方々から、今の吉祥寺について率直な意見が出された。商店街との関係、街や生活習慣の変化、震災の影響に対する悩みや

気づき、つながりをつくる取り組み、街への想いについてなどさまざまな意見が交換され、危機感や問題意識が共有された。一方、会場からの質疑応答では、多くの人や新旧の店が集まる吉祥寺は憧れの街であるという声も聞かれ、街の魅力も再認識された。人と人とがつながり、街とつながっていくことが、街の魅力にもつながっていく。今回の会議では、その小さなひとつひとつの連鎖の大切さを共有できたのではないだろうか。



SYMPOSIUM「TERATOTERA FORUM the second term ～震災－地域－再考～」

10.29 | 武蔵野公会堂 [会議室]

10月29日午後、武蔵野公会堂会議室で、都市・地域計画家でアートプロジェクト・ディレクターの芹沢高志さん、消費社会研究家・マーケティングアナリストの三浦展さんをゲストに迎え、國時誠 TERATOTERAディレクターとともに、東日本大震災以降の「都市におけるアート」「アートの役割」を探るシンポジウムを開催した。テーマは「震災－地域－再考」。震災以降「アート」と「地域・都市」が直面している課題を解決するために、あるべき役割と現状を整理。約60名の来場者とともに、今後の新たな方向性について意見を交わすシンポジウムとなった。

始めに、ゲストがそれぞれ地域のアートプロジェクトに関わるようになった経緯や、吉祥寺という街とのかかわり、その魅力とかげりについて語った。続けて「3.11」以降の意識の変化や影響について触れ、ここ数年の地方都市の空洞化や均質化、それを止めるアートとアーティストの役割について語った。アーティストには問題解決ではなく問題を発見する力があり、容易には変えられない人々の生き方、暮らし方、人生観に異なる視点を提供し、作品を通して何もないところから関係を築いていくことができるという指摘があった。後半は、今回のシンポジウムに先立ち開催した店長会議で出された意見などを踏まえ、商店街と新しい店の世代を越えたつながりに対するアートプロジェクトも含めたアプローチについて、ゲストや吉祥寺在住のテラッコ及び来場者の実感もまじえての意見交換も行われた。ここでは、街を元気にする若者やよそ者が入り込む隙間を失って、かつての吉祥寺の魅力が西荻窪や高円寺など周辺に移ってきているという問題について、ゲストからはアートの発見力によって見出される魅力がまだ秘められているということが示された。身寄りもなくちょっとしたことにも不便を感じている高齢者と、住みたいけれど住めない若者の問題を同時に解決する方法として、来場者からリバースモダージュのアーティストへの開放などいくつかの提案がなされた。



三浦展



國時誠 (TERATOTERA ディレクター)



芹沢高志

インフォメーションセンター・街歩きツアー・ワークショップ

「TERATOTERA 祭り」のインフォメーションを、アトレ吉祥寺店の地下1階にある「ゆらぎの広場」に設置。
未来美術家の遠藤一郎が、自らの被災地での活動を写真と文章で紹介する作品も同じ場所で展示された。
「ゆらぎの広場」では遠藤一郎による凧作りのワークショップ、コピス吉祥寺では齋藤雄介による子供を
対象にしたワークショップを行い、アーティストの視点から吉祥寺の魅力を発見する「街歩きツアー」も行われた。

インフォメーションセンター

10. 20－10. 30 | アトレ吉祥寺 [B1 ゆらぎの広場]



今回のプロジェクトの「扉」であり「窓」であるインフォメーションセンターが「アトレ吉祥寺」に設置された。街歩きを楽しむ人々にいかにアートにふれてもらえるか、アートが存在する「new 吉祥寺」を認識してもらえるかという大切な役割を担っていた。同じ場所に、未来美術家・遠藤一郎が福島からのゲストとともに「ゆらぎの広場」で制作し井の頭公園で揚げた連凧が展示されたことで、福島や東日本大震災への想いを少しは届けられたのではないかな。
また、今回作成した防災情報付き「街歩きマップ」は好評だった。アートプロジェクトが街にとって一定の貢献をしたといえるだろう。

街歩きツアー「酒とお惣菜」「コーヒーとパン」

10. 22・10. 28 | 中道通り・昭和通り・大正通り・西エリア

アーティストと吉祥寺のまちなかを散歩する「吉祥寺ツアー」。
このツアーの先頭に立つのは、浅草橋天才算数塾の占い師パウロ野中とDJ ぷりぷりだ。会期中2回開催され、1回目（10月22日）は「酒とお惣菜」、2回目（10月28日）は「コーヒーとパン」をそれぞれテーマに吉祥寺のまちを歩いた。
2回目のツアーに同行した。参加者はアーティストを含め全部で10人。散歩したのは、中道通り、昭和通り、大正通りと3本の大きな通りがある西エリア。碁盤の目のようなまちを行



遠藤一郎 凧揚げワークショップ「未来龍東京大空凧」

10. 22 | アトレ吉祥寺 [B1 ゆらぎの広場]・井の頭恩賜公園 [西園グラウンド]

遠藤一郎による「未来龍東京大空凧」のワークショップが10月22日に行われた。これは特別企画「TOKYO-FUKUSHIMA!」の一環。遠藤のマイクロバス「未来へ号」で福島から訪れた約30人の参加者を中心に、凧にメッセージを描き、それをつなげた連凧を制作した。
当初は井の頭公園西園グラウンドで凧の制作から凧揚げまで行われる予定だった。しかし、当日は朝から大粒の雨。会場を急遽「ゆらぎの広場」に変更し、凧を制作した。通りがかつ



た人なども参加し約70枚の凧ができあがった。
凧の制作が終わったところ、雨が上がったので井の頭公園へ移動し、凧揚げを実施した。参加者が協力して、1メートル間隔でつなげていき、全長約70メートルの連凧が完成。それを遠藤が助走して挙げると、まるで解き放たれた龍が大空を泳いでいるかのようなだった。自分たちの想いを乗せて空を舞う凧を、参加者全員が誇らしげな顔で見上げる。そんな、ホッコリするワークショップだった。



齋藤雄介 子供ワークショップ「日常アニマルズ!」

10. 22 | コピス吉祥寺

コピス吉祥寺に作品展示した齋藤雄介による子供ワークショップ「日常アニマルズ」が10月22日に開かれた。既製品を利用する齋藤の手法を手がかりに、参加者はマグカップ、フォーク、洗濯バサミなどの日用品の中から好きなものを選び、それらを組み合わせ、フェルトペンやシールなどで装飾を加えて動物を制作する。日常意識している物の用途・形状から離れ、物の持つ別の側面の発見を目的の一つとした。会場はコピス吉祥寺4階のショッピングフロアの一角。2～12歳の子供たち13人が参加した。子供たちは漏斗をゾウの鼻に、モップをライオンのたてがみに見立てるなどして、それぞれ自発的に制作していた。また、親子で考え意見を交わし、一緒になって制作している姿も印象的だった。
制作前のレクチャーであえて見本を提示しなかったためか、子供たちの作品はコアラやクマのような動物らしい動物もあれば、妖怪やロボットのような未知の「動物」もあり、十人十色の作品が完成した。子供たちの驚きや笑顔があふれるワークショップとなった。



TERATOTERA祭りまでの歩み

	定例会 (全体)
	イベント・展示関連 (各チームの動き)
	広報・ボランティア募集などその他
6 / 11	テラッコ屋・TERATOTERA 祭り説明会 (於:アーツ千代田 3331) 事務局開設
26	第1回テラッコ屋 (定例会) 総勢約 40 名が集合 吉祥寺会場下見 & 交流会、チーム分け発表 全7チーム: 広報、記録・ボランティアマネジメント、井の頭公園、武蔵野公会堂、バウスシアター、アート、ダンス
7 / 1	代表者会議 1 (各チーム代表による事務局ミーティング) 予定開催会場、イベント内容、出演予定作家発表、事務局の使用方法など確認
2・3	チーム会議
8	代表者会議 2 広報媒体収集、作家情報収集、ファイリング開始
9・10	チーム会議
15	代表者会議 3 井の頭リハーサル、ルート仮決定 ブログをチーム持ち回りで更新、武蔵野公会堂でのシンポにて地域連携の活動プロセスを発表することに
16	チーム会議
17	隅田川の「アンサンブルズ・パレード」参考見学 広報用作家プロフィール作成
23	第2回テラッコ屋 & 代表者会議 4 (於: 御殿山コミセン) 一部出展作家との顔合わせ、スケジュール・各作家の企画書準備
	チーム会議 出展作家も参加。アートチームと会場下見
29	代表者会議 5 イベント (ライブ・シンポジウム) 予約方法決定 バウス初日トークショー決定 吉祥寺美術館での福島大風呂敷展示決定
30・31	チーム会議 アート・ダンス出演作家の各担当者決定、各チームでイベント企画書作成
8 / 4	作家展示プラン発表 アート展示各作家の企画書作成
5	代表者会議 6 ダンス東急屋上での詳細が決定 アトレのインフォメーション設置及び遠藤一郎の展示が決定 各チーム企画書更新。会期中ボランティア事前説明会 10月8日に決定
	会期中ボランティア必要人数提出、募集フォーム作成
6・7	チーム会議 事前説明会会場決定、議事録ファイリング チラシ・ポスターの配布枚数を確認。配布場所リサーチ 作家プラン詳細確認。作家設置場所確認街歩き 地域団体へのパレード出演依頼、各イベント予約受付担当決定
12	代表者会議 7 各チーム詳細な企画書 (案) が出揃う
13・14	チーム会議 会期中ボランティア募集条件決定 チラシ街置きリストアップ担当分け 開催会場向けプレゼン企画書推敲 LIVE 予約受付方法の仮決定。映像チラシ作成開始 オーケストラリハーサルの場所を井の頭公園に決定。パレード公募内容を決定 イベント当日の担当を振り分け
15	「フェスティバル FUKUSHIMA!」参考見学 ラジオ企画売り込み、紙媒体への電話掛け パルコへ作家企画書提出
20	第3回テラッコ屋 (於: 武蔵野商工会館 4F 会議室) ハモニカ横丁、コビス吉祥寺がアート展示会場として追加決定



	各チーム、企画書完成 チケット作成。予約受付担当分け
	紙媒体へのプレスリリース発送 WEB に祭りの概要がアップ
23	イベント予約スタート (クロージングダンス、公会堂・バウス T-F ライブ、T-F シンポジウム)
26	代表者会議 8 TOKYO-FUKUSHIMA! シンポジウム出演者決定
27・28	チーム会議 チラシ街置き計画、ボランティア説明会詳細決定 応募返信フォーム作成、テラッコ会期中スケジュール作成 地域連携マップ掲載協力店舗、内容再考
	会期中ボランティア募集開始
9 / 3	第4回テラッコ屋 各チームによるプレゼン大会 (於: アーツ千代田 3331) 映像による作家プラン発表、ダンス出演者紹介 各イベントの全体像をチーム毎にプレゼン。チラシ街置き振り分け等 映像トークショー、LIVE 出演者決定。遠藤一郎風揚げワークショップ決定 店長会議参加者決定。アーティトお勧めのお店確定
	アーティストインタビューブログへ掲載開始 週刊誌、WEB 媒体へのアプローチ & プレスリリース送付
9	代表者会議 9 当日のタイムスケジュール・マニュアル作成開始
	全体チラシ完成 (9月上旬〜) 関係各所へ発送
	映像プログラム作成
17	第5回テラッコ屋 (於: 御殿山コミセン) 全体チラシ街置きテラッコで振り分け 岩井優ハモニカ清掃撮影 オーケストラ公募 & ボランティア募集チラシ、バウスシアター映像チラシ完成
	オーケストラ出演者との事前打ち合わせ、周辺協力施設への挨拶
23	代表者会議 10 吉祥寺のチラシ街置き 搬入日調整、各イベントタイムスケジュール作成 齋藤雄介 子供ワークショップ決定 店長会議会場決定
	小田急バスにポスター掲示 ボランティア説明会向けマニュアル作成
30	会期中ボランティア応募締切
10 / 2	第6回テラッコ屋最終確認 (於: 御殿山コミセン) チーム毎の開催までの詳細スケジュールの共有。各イベント予約状況の発表
1・2	チーム会議
4	当日タイムスケジュール詳細決定
5 - 14	むさしの FM テラッコ出演
7	代表者会議 11
8	会期中ボランティア事前説明会 (於: 南町コミセン) & 懇親会
8・9	チーム会議 当日の仕事担当決定、アンケート作成、チケット作成
10	街歩きマップ完成 吉祥寺周辺地域へ配布
14	代表者会議 12
15・16	チーム会議 会期中の記録、会期中ボランティア配置表作成 チーム内最終確認 騒音苦情対策周辺地域へ案内チラシポスティング、マップの街置き キャプション・案内板作成
16 - 19	テラッコも手伝い作品搬入・設置
17	オーケストラ公募締切
20 - 30	本番
31 - 11 / 2	搬出
3	反省会

TERAKKOのコメント

ときどきドキドキ吉祥寺

范 丹明

前から気になっていた「TERATOTERA」の活動に、今回は運営側として参加する機会に恵まれました。7月からの準備期間は、勉強になることがたくさんありました。作家さんを知るためにいろいろ調べたり、展示を巡ったりして、今まで理解困難だと思って距離を置いていた、いわゆる現代アートに触れることができ、物事に対する考え方や捉え方も変わってきた気がします。たとえ理解ができなくても、それなりの楽しみ方があるとも思えてきました。そして、作品の制作を直接お手伝いするという、貴重な経験もできました。早朝、まだほとんどの店が閉まっている吉祥寺の一角、ハモニカ横丁では、ひそかにお掃除隊が出動していました。お掃除しているうちに、店開きの準備をしている方や通りすがりの方に遭遇し、ドキドキしながら作家さんがその方々に説明するのを見守っていました。そのように興味を持ってもらえることで、地域の方々とのつながりを感じました。

酒とアートの日々

高村瑞世

夜9時を過ぎてなお明るい道を、自分の鳴らすハイヒールの音を聞きながら駅へ向かう。「3.11」と呼ばれる東日本大震災当日の混乱がまるで嘘のように、東京の街はすっかり日常を取り戻したように見える。表情を隠し急ぎ足で進む人の波の中で、アートに何が出来るのか、わたしは「TERATOTERA祭り」の中でリアリティーを持って受け止めた。会期中、わたしは連日日付が変わるまで、多くの方とひとつのテーブルを囲みお酒を交わしていた。アーティストからテラッコまで作り手たちが集う打ち上げは、その場所に踏み込まなければ出会えなかった方たちと語らえる、貴重な時間であった。福島在住の方の日常、アーティストが作品に込めた想い、テラッコの夢から恋愛事情に至るまで、それぞれのリアルな「今」が交わされた。必ず反対論が沸き上がる原発やアートについての話題、口をつぐむことの多かったわたしも、気づくと身を乗り出していた。アートについても震災についても、正

いよいよ本番。その前には作品の搬入と設営がありました。限られた時間に、とても大きな作品たちをどう屋上に運ぶのかずっと心配していましたが、皆さんがいれば何事もなんとかなっちゃうってことを実感できて、本当に感謝感激です！日中の設営はお手伝いできませんでしたが、着々と成形されていく作品を見て、たくさんの方に見てもらいたい気持ちが段々強くなってきました。お祭り期間中、いろんな方々とお会いできて、お話が聞けたのが本当に楽しくて、毎日会場へ行くのを楽しみにしていました。こんな暖かいつながりをずっと保っていきたいと思います。

解などなく、自分が身を持って感じたことが一番リアルである。個々が持つその感覚を、向き合って分かち合うことから何事も始まっていくのだと感じた。せわしなさを取り戻した日々の中で、本来もつと当たり前にされるべき対話から、わたしは目を逸らしていたのだと思う。「TERATOTERA祭り」は、感情や時間を共有するきっかけとなってくれた。会期を終えて自然と湧き起こったのは、「アートには人をつなぐ力がある」という実感である。来年再来年と、もつともつと多くの人を巻き込んでいきたいと思う。ネット上でのつながりではなく、リアルな世界での対話を生む糸口として。そこには普段向き合えていない自分との対面が、必ず待っているはずである。

祭りを眺めて

田中秀康

今回の「TERATOTERA祭り」のメインテーマである「post」には「3.11＝東日本大震災」以降のアートや表現のあり方を探るというメッセージが込められています。個人的には、「TERATOTERA祭り」に参加することを通じて、以前よりも、一人一人の持つ個性を強く意識するようになったように思っています。私は主に、広報活動をするグループの調整役を担当させていただきました。広報を担当するにあたって、「TERATOTERA祭り」を広く知ってもらうために、そして、その魅力をよりよく伝えられるように、プロジェクト全体に目を向けていました。限られた時間の中で、多岐に渡る活動すべてを目にすることは叶いませんでしたが、アーティストとボランティア、地域の方々とボランティアが正面から向きあう場面に会うことが出来ました。

軍手high デイズ

脇屋佐起子

アートプロジェクト初心者テラッコたちが、想像力によるシミュレーションと数量化、綿密なML（メーリングリスト）連絡網、出どころ不明の尽きぬ熱意と、それに伴う行動力で「TERATOTERA祭り」を成功させた。彼らは作家たちとの交流を通じて作家の意図を理解しサポートするまでに成長し、私は企画書作成、作家の経歴やキャプション編集などで間接的にサポートする。日々の作業に追われ、テラッコたちにうつすらと閉塞感が見え始めた頃、会期が目前に迫った。作品搬入の手伝いに集うテラッコたちは、カバンに忍ばせた一組の軍手というドレスコードでつながっていて、それは夜のデパートに怪しげな物体を淡々と運び込むという非日常的で、淡く後ろめたい共犯関係を作家とテラッコの間に築く。軍手をはめると、妙な解放感を伴うお仕事スイッチが入る感覚が癖になってくる。完全に軍手 high 一。閉塞感が

ある人は街の一員として地域との関係作りを担い、ある人はこれまで築いたアートに関する造詣・アーティストとのつながりを活かして、他のボランティアメンバーへアートの理解を促す。またある人が編集の技術を用いて、プロジェクト全体を総括する。さながら梁山泊のように、ボランティアのメンバーそれぞれが個性的に力を発揮する場面にふれ、一人一人が頼もしく感じられ、また、アーティスト、地域の方々と正面から関われることを羨ましくも感じました。個人的には広報担当として、自分の目にした「TERATOTERA祭り」の魅力を多くの人に、十分に伝えきれなかったことが心残りです。それでも、人が集い、交わり、出せる力を持ち寄れば、ここまでのことができる、という可能性に触れたことが、自分にとって何よりも良い経験であったと思っています。

らの脱却を感じた瞬間は、同時にテラッコたちに部活のような一体感ももたらした。また毎晩開催されるイベントの手伝いの際をみては、毎日豪華な刺激のおまけももらった。遠藤ミチロウさんの魂の叫び、タタタカコさんの鬼気迫る演奏、パレードの丸く広がってゆく空気感、吉祥寺の今を感じるシンポジウム、contact Gonzoの骨太ながらチャーミングなパフォーマンスなど。大した手伝いもできなかったのに、もらいすぎたか(笑)。たかが軍手、されど軍手。次の軍手 high デイズは一体いつ訪れるだろう。



OZマガジン No.473 9月号 | 2011年8月12日



リビングむさしの 1763号 | 2011年10月8日



ART iT | 2011年10月4日



CINRA.NET | 2011年10月3日



yahoo ニュース | 2011年9月5日

その他の雑誌・新聞掲載	発行日	その他のWEB掲載	配信日
-		-	
装苑 11月号	2011年9月28日	メトロミッツ No.108 11月号	2011年10月20日
atre EVENTSCCHEDULE 10月	2011年10月	散歩の達人 No.188 11月号	2011年10月21日
PARCO チラシ	2011年10月	朝日新聞 むさしの版	2011年10月21日
ARTNAVI[美術手帖] 10月号	2011年10月1日	朝日新聞 むさしの版	2011年10月23日
吉祥寺ECCO!! 10月号	2011年10月4日	週刊きちじょうじ No.1912	2011年10月28日
市報むさしの No.1912	2011年10月15日		

ラジオ企画

東日本大震災後、ラジオは必要な情報を迅速に伝えるメディアとして、改めてその存在感を示した。ラジオはまた、限定された聴取地域に発信するという点で、街との結びつきが強いメディアと言える。震災とラジオの結びつき、街とラジオの結びつきは「TERATOTERA祭り」を大きく盛り上げる力となると思い、この企画を立ち上げた。

むさしのFM「TERATOTERA祭り」関連放送。

テラッコが生出演し、インタビュー形式で行われた。

10月5日(水)午前9時10分～「むさしのtoday」

地域連携チーム 渡辺有子

10月14日(金)14時20分～40分「発信! わがまち・武蔵野人」

事務局 小澤恭子(たこ)

10月10日～14日は「TERATOTERA特集」として、5日間日替わりでテラッコが登場し、企画内容、エピソード、見所等がインタビュー形式で紹介された。

10月10日(月)午前11時15分～ | 広報チーム 高木絹子

10月11日(火)午前11時15分～ | バウスシアターチーム

加藤裕士

10月12日(水)午前11時15分～ | ダンスチーム 遠山尚江

10月13日(木)午前11時15分～ | 井の頭公園チーム 吉田絵美

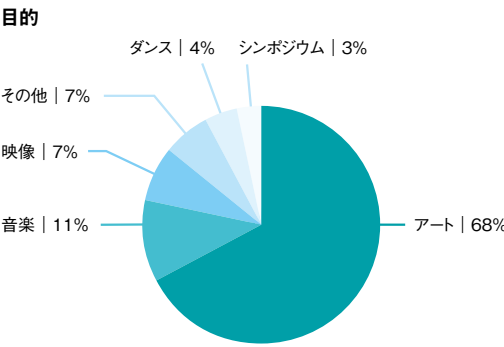
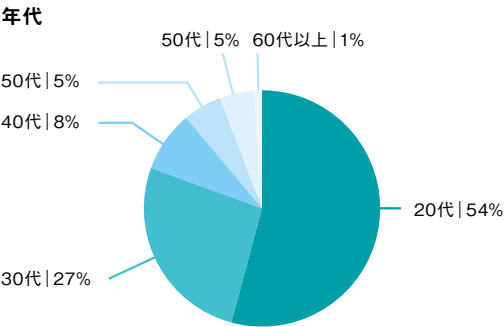
10月14日(金)午前11時15分～ | アートチーム 加藤彩菜

「TERATOTERA祭り開催直前リポート」

10月20日(木)午前10時10分～、午前10時45分～

吉祥寺美術館ロビー、吉祥寺PARCO 屋上から生中継

アンケート集計・感想・意見



感想

震災に絡めて

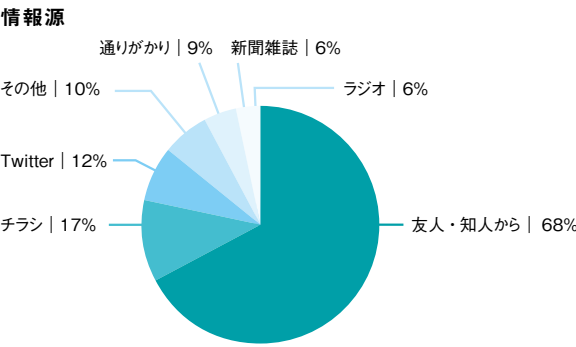
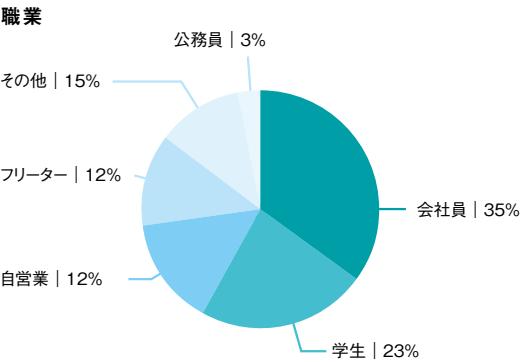
- ・「アート×防災+街づくり」というスタート地点は、今住んでいる札幌でもその動きがあるので興味深かった。
- ・色々な人が震災後に協力して具体的な行動に移しているのを見て刺激を受けた。是非今後も開催を続けて欲しい
- ・思い出とは異なる仕方でフクシマを発見あるいは現前化してくれるような造形や表現
- ・とてもすばらしくカッコいいものを見させてもらいました。本当にありがとうございます。自分も被災地の方々のためにやれることをやりたいと思います。

作品に対し

- ・エネルギーのある若い作家の作品が楽しめた
- ・大風の後なので、展示がきちんと出来ていなかったのでもっと言えないが、若い！
- ・作りが細かくて不思議な作品ばかり
- ・枯れたサーカスの印象。もっと荒れてもいいかと
- ・シュールで笑えた
- ・カオスでした

屋上×作品

- ・全体的に傷い感じがする。それは場所の性質？
- ・屋上に展示するというのが、まわりの雰囲気や地上で見ると異なるので、面白く感じた。
- ・バルコ屋上が思いのほか寂びれている。その状態と相まってとても不思議なアーティスト的な空間であった。
- ・屋上少し不気味でした。
- ・現代美術はよく見る方だが、今回は学園祭のやつつけ仕事のような感じでお粗末だった。
- ・無機質な屋上で、個々の異空間が妙にマッチしておもしろかった
- ・なんだかやったもん勝ちだな~と思った。
- ・作品がもう少し大きいといい
- ・現代アート→「ぐちゃー」とすばらしいものでもないような気がする。
- ・屋上の作品は廃品を用いたものが多く差異化できていない印象
- ・人を集めるならもう少しがんばってちゃんと作品を作ってほしい。
- ・雑なだけで勢いが無い。スタッフもだらけていて感じが良くなかった。
- ・現代美術を甘く見ているようなガラクタみたいな作品がほとんどでかしくなった。
- ・屋上というのが、哀愁があって良かった
- ・吉祥寺にあっていい
- ・吉祥寺がまた違った顔になって良いと思う



- ・全体的に会場の広さや環境と合っている
- ・吉祥寺全部で楽しい
- ・吉祥寺っぽいが作品やアートに対して忍耐とか情熱とかがもっと欲しい。
- ・アート作品を置いているだけで、この場所で開催する必要性が感じられない。空間を有効的に利用、デザインするべきだと思う。
- ・タダで面白いものを見る事が出来る
- ・手作り感が良かった
- ・夜に来るのが良い

意見

作品展示方法について

- ・もっと作品を増やしても見応えがあるのでは、と思うスペースもあった
- ・閑散としている印象。いわゆる「アートをあまり見た事ない人」に対する説明がもう少し必要かと。
- ・作品の意図がわかるようにしてくれるといい。
- ・キャプション(作品の説明など)をもっと充実させたら、もっとステキだと思う
- ・作家のプロフィールが分かりにくく、残念
- ・まとまった作品がある所に展示できると良い。
- ・展示方法の工夫が欲しい
- ・屋上をもっと贅沢に使って欲しい
- ・オルタナティブスペースでしかできない作品を見た

宣伝等について

- ・バルコの前でもっと大々的に宣伝した方がもっと観客が来ると思う
- ・バルコ入り口の表示に気づかないので、もっと宣伝を！
- ・ハモニカ横丁のどこにあるのかわからなかった。残念。

要望

- ・今、日本がつまらないから、もっとこういったイベントやARTを広めて欲しい
- ・デパートの屋上で定期的にできると良い
- ・イベントを増やして欲しい
- ・音楽系のイベントをもっと
- ・音楽のコラボをもっと見たい
- ・バウスシアターの映像を夜だけでなく日中も見れるようにしてほしい
- ・パフォーマンスや映像は時間が合わなくて見るのが難しいのでそれをどうにか改善して欲しい。(USTREAMなど)
- ・チラシの型版を合わせて欲しい
- ・インフォメーションがアトレのB1じゃ目立たなくてもいい

作家・出演者紹介

ART

浅井裕介 アーティスト

有賀慎吾 アーティスト

岩井 優 アーティスト

遠藤一郎 アーティスト

利部志穂 アーティスト

齋藤雄介 アーティスト

志村信裕 アーティスト

SONTON アーティスト

タムラサトル アーティスト

永畑智大 アーティスト

東方悠平 アーティスト

松原壮志朗 アーティスト

村田峰紀 アーティスト

和田昌宏 アーティスト

-

MOVIE

泉 太郎 アーティスト

大木裕之 アーティスト

小沢裕子 アーティスト

小泉明朗 アーティスト

小鷹拓郎 アーティスト

COBRA, 千葉正也, + その他 アーティスト

鷺山啓輔 アーティスト

地主麻衣子 アーティスト

柴田祐輔 アーティスト

鈴木 光 アーティスト

高田冬彦 アーティスト

田中功起 アーティスト

Chim ↑ Pom アーティスト

東野哲史 アーティスト

松本 力 アーティスト

山本 篤 アーティスト

山本高之 アーティスト

-

DANCE

KENTARO!! ダンサー

熊谷和徳 タップダンサー

小尻健太 ダンサー

contact Gonzo パフォーマー

森川次朗 × フロム東京 ダンサー

LIVE

高田 漣 音楽家・マルチ弦楽器奏者

タテタカコ 音楽家

前野健太 音楽家

-

SYMPOSIUM

芹沢高志 アートプロジェクト・ディレクター

三浦 展 マーケティング・アナリスト

-

店長会議

小林和人 Roundabout

佐藤桃子 momocurry

樽本樹廣 百年

中林 隆 PARADA

松江勇武 おふろ屋台

武川寛幸 バウスシアター

吉田幸恵 シルバーエレファント

小野塚桂 108 号室

-

街歩きツアー

DJ ぶりぶり アーティスト

パウロ野中 占い師

-

TOKYO-FUKUSHIMA!

遠藤ミチロウ 音楽家

大友良英 音楽家・ギタリスト

チャンチキトレネエド ミュージシャン

ちんどんおてんきや ミュージシャン

中崎 透 アーティスト

七尾旅人 ミュージシャン

原田郁子 音楽家

ピカ☆ パフォーマー

深川バロン倶楽部 バリ舞踊グループ

和合亮一 詩人

TERATOTERA & TERAKKO STAFF

ディレクター

小川 希 [チーフディレクター]

國時 誠 [ディレクター]

-

事務局

全体の把握・管理、チームフォロー、企画書作成、会場との調整、スケジュール進行管理

-

小澤恭子 (たこ) 加藤 惟

田中秀康 前川順子

脇屋佐起子

-

広報

出演者情報の収集整理、広報の配布先リスト・スケジュール、発送・街置き、プレスリリース準備、プレス対応、ラジオ企画、アーティ

ストインタビュー

-

大橋裕之 小野菜奈佳

高木絹子 高橋晃美

和田彩音

-

記録・ボランティアマネジメント

定例会義など議事録作成・ファイリング、記録写真撮影、当日ボ

ランティア募集・管理、開催期間中のスケジュール管理、記録

冊子作成

-

伊藤真希子 千葉佐奈子

土井美穂 豊田有里

-

バウスシアター

「映像」、「TOKYO-FUKUSHIMA! LIVE!」作家・出演者の写

真・プロフィール収集、作家・出演者との調整、当日進行管理

-

加藤裕士 秋元 敦

須永菜穂子 角麻理子

-

井の頭公園

「オーケストラTOKYO-FUKUSHIMA!」参加者募集・管理、出演

者・公募参加者の調整、当日進行管理、周辺地域へのフォロー

-

菊池真弓 田中絵美

丸山宏美 望月麻里

吉田絵美

武蔵野公会堂

「TERATOTERA祭リススペシャルライブ in 武蔵野公会堂」出演

者の写真・プロフィール収集、出演者との調整、当日進行管理、

音響・会場との打ち合わせ、予約管理

大野 碧

加藤更紗

小林加奈

高村瑞世

竹内友貴

-

アート展示

作家の写真・プロフィール収集、作家との調整、作家制作補助、

作品企画書作成、アンケート集計

-

秋葉大介 大内彩香

加藤彩葉 西岡一正

東 晶子 范 丹明

-

オープニングパーティ&ダンス・クロージングダンス

ダンサーの写真・プロフィール収集、作家との調整、当日進行管

理、予約管理

-

池上ひろ子 岩井桃子

滝本亜魅子 遠山尚江

藤島志穂 山本麻里

-

地域連携

TERATOTERA祭り協力店の情報収集、震災MAP制作、地域

連携方法の考察、シンポジウム・店長会議の進行管理

-

加藤 惟 高橋一也

舟橋 幸 武倉由莉

渡辺有子

-

宣伝美術

-

植村建太 [WEB 構築]

原田光丞 [グラフィックデザイン]

-

――

――

東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)

-

森 司 [東京アートポイント計画ディレクター]

大内伸輔 [東京アートポイント計画 プログラムオフィサー]

おわりに

TERATOTERA 初めての記録誌の完成。
こんなにも詰まったプロジェクトが実現出来たことがまるで夢のようです。様々な事情により「TERATOTERA 祭り」が決定し動き出したのは2011年6月のこと、それから開催までには4ヵ月あまり。震災後の不安定なそれぞれの気持ちもまだある頃に走りだしました。それは“^{ポスト}post”というメインテーマにも反映されているように、周囲の心の不安を感じつつもこの「TERATOTERA 祭り」をやる意味を常に問いながら、強く信じながら、夢中で進行させていきました。不安は人にうつります。一緒に立ち止まることよりも、私たちの目の前にあることを素直に表現することで新しく生まれるものを選びとったのです。

そして、「TERATOTERA 祭り」を終えこの記録を振り返ると、写っている表現者それぞれのかたち、関わった多くの人たち、ひとつひとつの表情が愛おしく、凜とした愛情を感じました。それが一番の飾らない正直な答えだったのだと思います。もちろん人により見え方は異なるでしょう。それも全て受け止めて「TERATOTERA 祭り」が完成したのだといえます。

2011年だからこそ、東京は吉祥寺という土地に蒔いた種、「TERATOTERA 祭り」。実をつけるのはまだ先です。今は足元に育った苗を気づいた通りすがりの人に愛でられながら成長しています。常に現在に身をおき、変化をしながら年輪を重ねていく。周囲からの意見や関わった人たちの課題がある限りTERATOTERAの未来は手の内にあると思います。

この突如出現した壮大な「TERATOTERA 祭り」を猛スピードで登りつめるには、テラッコ（ボランティアスタッフ）の奮闘と地域の方々からの多大な協力なしでは実現不可能でした。惜しめない尽力に心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

「TERATOTERA 祭り」事務局長
小澤恭子

TERATOTERA 祭り DOCUMENT
2011年10月20日－30日

編集	
西岡一正	千葉佐奈子 小澤恭子
-	
監修	
小川 希	
-	
デザイン	
原田光丞	
-	
写真	
松尾宇人	テラッコ
-	
協力	
大友良英	遠藤ミチロウ 和合亮一
テラッコー同	
-	
印刷・製本	
アベイズム株式会社	
-	
発行	
公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室	
〒130-0026	
東京都墨田区両国3-19-5 シュタム両国5階	
tel: 03.5638.8800	
fax: 03.5638.8811	
-	
お問合せ先	
一般社団法人TERATOTERA	
〒180-0002	
東京都武蔵野市吉祥寺東町1-8-7	
tel+fax: 0422.26.8454	
e-mail: info@teratotera.jp	
http://teratotera.jp	